

大正十五年勅令第二百四十三号

健康保険法施行令

目次

- 第一章 適用事業所の事業の範囲(第一条)
- 第二章 全国健康保険協会の資金の運用(第一条の二)
- 第三章 健康保険組合
 - 第一節 設立(第一条の三―第五条)
 - 第二節 管理(第六条―第十四条)
 - 第三節 財務及び会計(第十五条―第二十四条)
 - 第四節 特定健康保険組合の認可(第二十五条)
 - 第五節 地域型健康保険組合の一般保険料率の認可(第二十五条の二)
 - 第六節 合併及び分割並びに解散(第二十六条―第三十一条)
 - 第七節 雑則(第三十二条・第三十三条)
- 第四章 育児休業の根拠法令(第三十三条の二)
- 第五章 保険給付(第三十三条の三―第四十四条)
- 第六章 手数料(第四十四条の二・第四十四条の三)
- 第七章 費用の負担(第四十四条の四―第五十六条)
- 第八章 健康保険組合連合会(第五十七条―第六十条)
- 第九章 雑則(第六十一条―第七十三条)
- 附則
- 第一章 適用事業所の事業の範囲
 - 第一条 健康保険法(大正十一年法律第七十号以下「法」という。)第三条第三項第一号レの政令で定める者は、次のとおりとする。
 - 一 公証人
 - 二 司法書士
 - 三 土地家屋調査士
 - 四 行政書士
 - 五 海事代理人
 - 六 税理士
 - 七 社会保険労務士
 - 八 沖縄弁護士に関する政令(昭和四十七年政令第六十九号)第一条に規定する沖縄弁護士
 - 九 外国法事務弁護士
 - 十 弁理士

第二章 全国健康保険協会の資金の運用(資金の運用)

第一条の二 全国健康保険協会(以下「協会」という。)は、次の方法による場合を除くほか、業務上の余裕金を運用してはならない。

- 一 国債、地方債、政府保証債(その元本の償還及び利息の支払について政府が保証する債券をいう。)その他厚生労働大臣の指定する有価証券の取得
- 二 銀行その他厚生労働大臣の指定する金融機関への預金
- 三 信託業務を営む金融機関(金融機関の信託業務の兼営等に関する法律(昭和十八年法律第四十三号)第一条第一項の認可を受けた金融機関をいう。)(への金銭信託)

第三章 健康保険組合

第一節 設立

(健康保険組合の設立に必要な被保険者の数)

第一条の三 法第十一条第一項の政令で定める数は、七百人とする。

2 法第十一条第二項の政令で定める数は、三千人とする。

第二節 認可等の告示

2 厚生労働大臣は、健康保険組合の設立の認可をしたときは、次に掲げる事項を告示するものとする。

- 一 健康保険組合の名称
- 二 事務所所在地
- 三 設立事業所(健康保険組合が設立された適用事業所をいう。以下同じ。)の名称及び所在地
- 四 設立の認可の年月日
- 五 厚生労働大臣は、規約の変更を認可し、又は規約の変更の届出を受理した場合において、当該規約の変更が前項第一号又は第二号に掲げる事項に係るものであるときは、その事項を告示するものとする。

第三条 健康保険組合の認可の申請をした(規約の公告)

2 適用事業所の事業主は、健康保険組合の設立の認可があつたときは、速やかに、規約を公告しなければならない。

2 理事長は、規約が変更されたときは、速やかに、これを公告しなければならない。

(重要事項の報告)

第四条 健康保険組合の設立の認可の申請をした適用事業所の事業主は、健康保険組合の設立の認可があつたときは、速やかに、組合会を招集して健康保険組合の設立の経過その他重要な事項を報告しなければならない。

(理事長の職務の代行)

第五条 健康保険組合が成立したときは、理事長が選任されるまでの間、健康保険組合の設立の認可の申請をした適用事業所の事業主が、理事長の職務を行う。

第二節 管理

(組合会議員の任期)

第六条 組合会議員の任期は、三年を超えない範囲内で規約で定める期間とする。ただし、補欠の組合会議員の任期は、前任者の残任期間とする。

(組合会の招集)

第七条 組合会は、理事長が招集する。組合会議員の定数の三分の一以上の者が会議に付議すべき事項及び招集の理由を記載した書面を理事長に提出して組合会の招集を請求したときは、理事長は、その請求のあつた日から二十日以内に組合会を招集しなければならない。

- 2 理事長は、規約で定めるところにより、毎年一度通常組合会を招集しなければならない。
- 3 理事長は、必要があるときは、いつでも臨時組合会を招集することができる。
- 4 理事長は、組合会が成立しないとき、又は理事長において緊急を要すると認めるときは、組合会の議決を経なければならない事項で緊急に行う必要があるものを処分することができる。
- 5 理事長は、前項の規定による処置については、次の組合会においてこれを報告し、その承認を求めなければならない。

(組合会招集の手続)

第八条 組合会の招集は、緊急を要する場合を除き、開会の日の前日から起算して前五日目に当たる日が終わるまでに、会議に付議すべき事項、日時及び場所を示し、規約で定める方法に従つてしなければならない。

(定足数)

第九条 組合会は、組合会議員の定数(第十一条の規定により議決権を行使することができない組合会議員の数を除く。)の半数以上が出席しなければならない。議事を開き、議決をすることができる。

第十条 組合会に議長を置く。議長は、理事長をもって充てる。

- 2 組合会の議事は、法及びこの政令に別段の定めがある場合を除き、出席した組合会議員の過半数で決し、可否同数のときは、議長が決する。
- 3 規約の変更(法第十六条第二項の厚生労働省令で定める事項に係るものを除く。)の議事は、組合会議員の定数の三分の二以上の多数で決する。
- 4 組合会においては、第八条の規定によりあらかじめ通知した事項についてのみ議決することができる。ただし、出席した組合会議員の三分の二以上の同意があつた場合は、この限りでない。

(組合会議員の除斥)

第十一条 組合会議員は、特別の利害関係のある事項については、その議事に加わることができない。ただし、組合会の同意があつた場合は、会議に出席して発言することができる。

第十二条 組合会議員は、規約で定めるところにより、第八条の規定によりあらかじめ通知のあつた事項につき、書面又は代理人をもって、議決権又は選挙権を行使することができる。ただし、他の組合会議員でなければ、代理人となることができない。

- 2 前項の規定により議決権又は選挙権を行使する者は、出席者とみなす。
- 3 代理人は、五人以上の組合会議員を代理することができない。
- 4 代理人は、代理権を証する書面を組合会に提出しなければならない。

(会議録)

第十三条 組合会の会議については、会議録を作成し、出席した組合会議員の氏名並びに議事の経過の要領及びその結果を記載しなければならない。

- 2 会議録には、議長及び組合会において定められた二人以上の組合会議員が署名しなければならない。
- 3 健康保険組合は、会議録を健康保険組合の主たる事務所に備え付けて置かなければならない。
- 4 組合員及び組合員であつた者は、健康保険組合に対し、会議録の閲覧を請求することができる。この場合において、健康保険組合は、正当な理由がある場合を除き、これを拒んではならない。

(役員) 第十四条 役員の任期は、三年を超えない範囲内で規約で定める期間とする。ただし、補欠の役員の任期は、前任者の残任期間とする。

2 役員は、その任期が満了しても、後任の役員が就任するまでの間は、なお、その職務を行う。

第三節 財務及び会計

(会計年度)

第十五条 健康保険組合の会計年度は、毎年四月一日に始まり、翌年三月三十一日に終わる。ただし、事業開始の初年度にあつては、事業開始の日に始まり、翌年(事業開始の日が一月一日以降三月三十一日以前であるときは、その年の三月三十一日に終わる。

(予算の届出等)

第十六条 健康保険組合は、毎年度、収入支出の予算を作成し、当該年度の開始前に、厚生労働大臣に届け出なければならない。これを変更したときも、同様とする。

2 予算に定めた各款の金額は、相互に流用することができない。

3 予算に定めた各項の金額は、組合会の議決を経て、相互に流用することができる。

(継続費)

第十七条 健康保険組合は、組合会の議決を経て継続費を設けることができる。

(予備費)

第十八条 健康保険組合は、予算超過の支出又は予算外の支出に充てるため、予備費を設けなければならない。

2 予備費は、組合会の否決した使途に充てることができない。

(出納閉鎖期)

第十九条 健康保険組合において、収入金を収納するのは翌年度の五月三十一日、支出金を支払うのは翌年度の四月三十日限りとする。

(準備金の取崩し)

第二十条 健康保険組合は、保険給付に要する費用(高齢者の医療の確保に関する法律(昭和五十七年法律第八十号)の規定による前期高齢者納付金等(以下「前期高齢者納付金等」という。))、同法の規定による後期高齢者支援金等(以下「後期高齢者支援金等」という。))及び法第七十三条の規定による拠出金(以下「日雇拠出金」という。))並びに介護保険法(平成九年法律第二百二十三号)の規定による納付金(第九

二十九条及び第四十六条において「介護納付金」という。)の納付に要する費用を含む。)の不足を補う場合を除いては、準備金を取り崩してはならない。

(繰替使用等)

第二十一条 健康保険組合は、支払上現金に不足を生じたときは、準備金に属する現金を繰替使用し、又は一時借入金をすることができ、

2 前項の規定により繰替使用した金額及び一時借入金は、当該会計年度内に返還しなければならない。

(組合債)

第二十二条 健康保険組合は、組合債を起し、又は起債の方法、利率若しくは償還の方法を変更しようとするときは、厚生労働大臣の認可を受けなければならない。ただし、厚生労働省令で定める軽微な変更をしようとするときは、この限りでない。

2 健康保険組合は、前項ただし書の厚生労働省令で定める軽微な変更をしたときは、遅滞なく、その旨を厚生労働大臣に届け出なければならない。

(重要な財産の処分)

第二十三条 健康保険組合は、重要な財産を処分しようとするときは、厚生労働大臣の認可を受けなければならない。

(報告書の提出)

第二十四条 健康保険組合は、毎年度終了後六月以内に、厚生労働省令で定めるところにより、事業及び決算に関する報告書を作成し、厚生労働大臣に提出しなければならない。

2 健康保険組合は、前項の書類を健康保険組合の主たる事務所に備え付けて置かなければならない。

3 組合員及び組合員であった者は、健康保険組合に対し、前項の書類の閲覧を請求することができる。この場合において、健康保険組合は、正当な理由がある場合を除き、これを拒んではならない。

第四節

第二十五条 健康保険組合は、法附則第三条第一項の認可を受けようとするとき、又は同項の認可の取消しを受けようとするときは、組合会において組合会議員の定数の三分の二以上の多数により議決しなければならない。

第五節

第二十五条の二 法附則第三条の二第一項に規定する地域型健康保険組合は、同条第二項の認可

を受けようとするときは、合併前の健康保険組合を単位として不均一の一般保険料率を設定することとし、当該一般保険料率並びにこれを適用すべき被保険者の要件及び期間について、当該地域型健康保険組合の組合会において組合会議員の定数の三分の二以上の多数により議決しなければならない。

第六節 合併及び分割並びに解散

(合併又は分割の告示)

第二十六条 厚生労働大臣は、健康保険組合の合併又は分割の認可をしたときは、合併若しくは分割により設立し、又は消滅した健康保険組合及び合併又は分割後存続する健康保険組合について、次に掲げる事項を告示するものとする。

- 一 健康保険組合の名称
二 事務所の所在地
三 設立事業所の名称及び所在地
四 合併又は分割の認可の年月日

(債務を完済するための費用負担の求め)

第二十七条 法第二十六条第三項の規定により設立事業所の事業主に負担することを求めることができる費用の額は、債務を完済するために要する費用の全部に相当する額とする。ただし、破産手続開始の決定その他特別の理由により、当該事業主が当該費用を負担することができないときは、健康保険組合は、厚生労働大臣の承認を得て、これを減額し、又は免除することができる。

(解散の告示)

第二十八条 厚生労働大臣は、健康保険組合が解散したときは、次に掲げる事項を告示するものとする。

- 一 健康保険組合の名称
二 事務所の所在地
三 設立事業所の名称及び所在地
四 解散の認可又は解散の命令の年月日

(指定の要件)

第二十九条 法第二十八条第一項の政令で定める要件は、一の年度の決算において支出(経常的なものとして厚生労働大臣が定めるものに限る。)の額が収入(経常的なものとして厚生労働大臣が定めるものに限る。)の額を超える状態が継続し、かつ、一の年度における健康保険組合の保険給付に要した費用の額(前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拠出金並びに介護納付金の納付に要した費用の額(高齢者の医療の確保に関する法律の規定による前

期高齢者交付金(以下この条、第四十六条、第六十五条第一項第一号及び第六十七条第三項において「前期高齢者交付金」という。))がある場合には、これを控除した額)を含み、被保険者又はその被扶養者が法第六十三条第三項三号に掲げる病院若しくは診療所又は薬局から受けた療養に係る保険給付に要した費用の額を除く。)から法第五十三条に規定するその他の給付及び介護納付金の納付に要した費用の額を控除した額を当該年度における当該健康保険組合の組合員である被保険者の標準報酬月額総額及び標準賞与額の総額の合算額で除して得た率が千分の九十五を超える状態が継続する健康保険組合であつて、準備金その他厚生労働大臣が定める財産の額が法第二十八条第一項の指定をすべき年度の直前の三箇年度において行った保険給付に要した費用の額(被保険者又はその被扶養者が法第六十三条第三項三号に掲げる病院若しくは診療所又は薬局から受けた療養に係る保険給付に要した費用の額を除く。)の一年度当たりの平均額の十二分の三に相当する額と法第二十八条第一項の指定をすべき年度の直前の三箇年度において行った前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拠出金並びに介護納付金の納付に要した費用の額(前期高齢者交付金がある場合には、これを控除した額)の一年度当たりの平均額の十二分の三に相当する額とを合算した額を下回ったものとする。

(健全化計画)

第三十条 法第二十八条第一項に規定する健全化計画(次項及び次条において単に「健全化計画」という。)は、法第二十八条第一項の規定による指定の日の属する年度の翌年度を初年度とする三箇年間の計画とする。

2 健全化計画には、次に掲げる事項を記載しなければならない。

- 一 事業及び財産の現状
二 財政の健全化の目標
三 前号の目標を達成するために必要な具体的措置及びこれに伴う収入支出の増減の見込額

(解散を命ずることができ指定健康保険組合)

第三十一条 法第二十九条第二項の政令で定める指定健康保険組合は、次のとおりとする。

- 一 厚生労働大臣が指定する期日までに健全化計画の承認を申請しない指定健康保険組合

二 健全化計画の承認を受けることができない指定健康保険組合

第七節 雑則

(権限の委任)

第三十二条 この章に規定する厚生労働大臣の権限の一部は、厚生労働省令で定めるところにより、地方厚生局長に委任することができる。

2 前項の規定により地方厚生局長に委任された地方厚生支局長に委任するところにより、(厚生労働省令への委任)

第三十三条 この章に規定するもののほか、健康保険組合に関して必要な事項は、厚生労働省令で定める。

第四章 育児休業の根拠法令

第三十三条の二 法第四十三条の二第一項の政令で定める法令は、次のとおりとする。

- 一 国会議員の育児休業等に関する法律(平成三年法律第八十号)
二 国家公務員の育児休業等に関する法律(平成三年法律第九十号)
三 地方公務員の育児休業等に関する法律(平成三年法律第九十号)

第五章 保険給付

(保険医療機関等の指定の拒否等に係る法律)

第三十三条の三 法第六十五条第三項第三号、第七十一条第二項第二号、第八十条第七号、第八十一条第四号、第八十九条第四項第五号及び第九十五条第八号の政令で定める法律は、次のとおりとする。

- 一 船員保険法(昭和十四年法律第七十三号)
二 医師法(昭和二十三年法律第二十一号)
三 歯科医師法(昭和二十三年法律第二十二号)
四 保健師助産師看護師法(昭和二十三年法律第二十三号)
五 医療法(昭和二十三年法律第二十五号)
六 私立学校教職員共済法(昭和二十八年法律第二十四号)
七 国家公務員共済組合法(昭和三十三年法律第二十八号)
八 国民健康保険法(昭和三十三年法律第九十二号)
九 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律(昭和三十五年法律第四十五号)

十 薬剤師法(昭和三十五年法律第四百四十六号)

十一 地方公務員共済組合法(昭和三十七年法律第五十二号)

十二 高齢者の医療の確保に関する法律

十三 再生医療等の安全性の確保等に関する法律(平成二十五年法律第八十五号)

十四 臨床研究法(平成二十九年法律第十六号)

2 法第八十条第九号、第八十一条第六号及び第九十五条第十号の政令で定める法律は、次のとおりとする。

- 一 船員保険法
二 医師法
三 歯科医師法
四 保健師助産師看護師法
五 医療法
六 私立学校教職員共済法
七 国家公務員共済組合法
八 国民健康保険法

九 医薬品、医療機器等の品質、有効性及び安全性の確保等に関する法律

十 薬剤師法

十一 地方公務員等共済組合法

十二 高齢者の医療の確保に関する法律

十三 再生医療等の安全性の確保等に関する法律

十四 臨床研究法

(二部負担金の割合が百分の三十となる場合)
第三十四条 法第七十四条第一項第三号の政令で定めるところにより算定した報酬の額は療養の給付を受ける月の標準報酬月額とし、同号の政令で定める額は二十八万円とする。

2 前項の規定は、次の各号のいずれかに該当する者については、適用しない。

- 一 被保険者及びその被扶養者(七十歳に達する日の属する月の翌月以後である場合に該当する者に限る。)
二 被保険者(その被扶養者(七十歳に達する日の属する月の翌月以後である場合に該当する者に限る。))がいけない者であつてその被扶養者であつた者(法第三条第七項ただし書に該当するに至つたため被扶養者でなくなった者であつて、同項ただし書に該当するに至つた日の属する月以後五年を経過する月までの間に限り、同日以後継続して同項ただし書に該当するものをいう。以下この号において同じ。)

た日の属する月以後五年を経過する月までの間に限り、同日以後継続して同項ただし書に該当するものをいう。以下この号において同じ。)

第三十五条 法第百条第一項の政令で定める金額は、五万円とする。

(出産育児一時金の金額)

第三十六条 法第百一条の政令で定める金額は、四十万八千円とする。ただし、病院、診療所、助産所その他の者であつて、次の各号に掲げる要件のいずれにも該当するものによる医学的管理の下における出産であると保険者が認めるときは、四十万八千円に、第一号に規定する保険契約に關し被保険者が追加的に必要となる費用の額を基準として、三万円を超えない範囲内で

一 当該病院、診療所、助産所その他の者による医学的管理の下における出産について、特定出産事故(出産(厚生労働省令で定める基準に該当する(出産)に係る事故(厚生労働省令で定める事由により発生したものを除く。))のうち、出生した者が当該事故により脳性麻痺にかかり、厚生労働省令で定める程度の障害の状態となつたものをいう。次号において同じ。))が発生した場合において、当該出生した者の養育に係る経済的負担の軽減を図るための補償金の支払に要する費用の支出に備えるための保険契約であつて厚生労働省令で定める要件に該当するものが締結されていること。

二 出産に係る医療の安全を確保し、当該医療の質の向上を図るため、厚生労働省令で定めるところにより、特定出産事故に関する情報の収集、整理、分析及び提供の適正かつ確実な実施のための措置を講じていること。

(傷病手当金と障害手当金等との併給調整)

第三十六条の二 法第百八条第四項ただし書の政令で定めるときは次の各号に掲げる場合とし、同項ただし書の政令で定める差額は当該各号に掲げる場合の区分に応じ当該各号に定める額とする。

- 一 報酬を受けることができない場合であつて、かつ、出産手当金の支給を受けることができる場合
二 報酬を受けることができない場合であつて、かつ、出産手当金の支給を受けることができない場合
三 報酬の全部又は一部を受けられる場合
四 報酬の全部又は一部を受けられる場合

できない場合(傷病手当金合計額(厚生年金保険法(昭和二十九年法律第十五号))による障害手当金の支給を受けることとなつた日以後に傷病手当金の支給を受けることとなる場合の法第九十九条第二項の規定により算定される額の合計額が当該障害手当金の額に達するに至る日における当該合計額をいう。以下この条において同じ。))と障害手当金の額との差額

できない場合(傷病手当金合計額(厚生年金保険法(昭和二十九年法律第十五号))による障害手当金の支給を受けることとなつた日以後に傷病手当金の支給を受けることとなる場合の法第九十九条第二項の規定により算定される額の合計額が当該障害手当金の額に達するに至る日における当該合計額をいう。以下この条において同じ。))と障害手当金の額との差額

二 報酬を受けることができない場合であつて、かつ、出産手当金の支給を受けることができる場合
三 報酬の全部又は一部を受けられる場合
四 報酬の全部又は一部を受けられる場合

三 報酬の全部又は一部を受けられる場合
四 報酬の全部又は一部を受けられる場合

四 報酬の全部又は一部を受けられる場合

第三十七条 法第百八条第五項の政令で定める要件は、法第百三十五条の規定により傷病手当金の支給を受けることができる日雇特別被保険者(日雇特別被保険者であつた者を含む。)

第四十一条の二、第四十三条の三及び第四十四条第二項から第七項までを除き、以下この章において同じ。でないこととする。

第三十七條 法第百八条第五項の政令で定める要件は、法第百三十五条の規定により傷病手当金の支給を受けることができる日雇特別被保険者(日雇特別被保険者であつた者を含む。)

(傷病手当金の併給調整の対象となる年金である給付)

第三十八條 法第八條第五項の老齡又は退職を支給事由とする年金である給付であつて政令で定めるものは、次のとおりとする。ただし、その全額につき支給を停止されている給付を除く。

- 一 国民年金法(昭和三十四年法律第四百一十一号)による老齡基礎年金及び同法附則第九條の三第一項の規定による老齡年金並びに国民年金法等の一部を改正する法律(昭和六十年法律第三十四号。次号及び第三号において「昭和六十年国民年金等改正法」といふ。)第一條の規定による改正前の国民年金法による老齡年金(老齡福祉年金を除く。)及び通算老齡年金
- 二 厚生年金保険法による老齡厚生年金及び特例老齡年金並びに昭和六十年国民年金等改正法第三條の規定による改正前の厚生年金保険法による老齡年金、通算老齡年金及び特例老齡年金
- 三 昭和六十年国民年金等改正法第五條の規定による改正前の船員保険法による老齡年金、通算老齡年金及び特例老齡年金
- 四 被用者年金制度の一元化等を図るための厚生年金保険法等の一部を改正する法律(平成二十四年法律第六十三号。以下「平成二十四年一元化法」といふ。)附則第三十六條第五項に規定する改正前国共済法による職域加算額のうち退職を給付事由とするもの及び平成二十四年一元化法附則第三十七條第一項に規定する給付のうち退職を給付事由とするもの
- 五 平成二十四年一元化法附則第四十一條第一項の規定による退職共済年金
- 六 平成二十四年一元化法附則第六十條第五項に規定する改正前地共済法による職域加算額のうち退職を給付事由とするもの及び平成二十四年一元化法附則第六十一條第一項に規定する給付のうち退職を給付事由とするもの
- 五の二 平成二十四年一元化法附則第六十五條第一項の規定による退職共済年金
- 七 厚生年金保険制度及び農林漁業団職員共済組合制度の統合を図るための農林漁業団体

職員共済組合法等を廃止する等の法律(平成十三年法律第一号)附則第十六條第三項の規定により厚生年金保険の実施者たる政府が支給するものとされた年金である給付のうち退職を給付事由とするもの

八 厚生年金保険法附則第二十八條に規定する共済組合が支給する年金である給付のうち退職を支給事由とするもの

第四十條 削除

第四十一條 高額療養費の支給要件及び支給額

第四十一條 高額療養費は、次に掲げる額を合算した額から次項から第五項までの規定により支給される高額療養費の額を控除した額(以下この項において「一部負担金等世帯合算額」といふ。)が高額療養費算定基準額を超える場合に支給するものとし、その額は、一部負担金等世帯合算額から高額療養費算定基準額を控除した額とする。

一 被保険者(法第九十八條第一項の規定により療養の給付又は保険外併用療養費若しくは訪問看護療養費の支給を受けている者を含み、日雇特例被保険者を除く。以下この条、第四十二條、第四十三條及び附則第二條において同じ。)又はその被扶養者(法第九十條第七項において準用する法第九十八條第一項の規定により支給される家族療養費に係る療養を受けている者又は法第九十一條第三項において準用する法第九十八條第一項の規定により支給される家族訪問看護療養費に係る療養を受けている者を含む。以下この条、第四十二條、第四十三條及び附則第二條において同じ。)が同一の月にそれぞれ一の病院、診療所、薬局その他の者(以下「病院等」といふ。)から受けた療養(法第六十三條第二項第一号に規定する食事療養(以下この条において単に「食事療養」といふ。)、同項第二号に規定する生活療養(以下この条において単に「生活療養」といふ。))及び当該被保険者又はその被扶養者が第八項の規定に該当する場合における同項に規定する療養を除く。以下この項から第五項まで、第四十三條第一項

及び第三項並びに第四十三條の二並びに附則第二條において同じ。)であつて次号に規定する特定給付対象療養以外のものに係る次のイからへまでに掲げる額(七十歳に達する日の属する月以前の療養に係るものにあつては、二万円(第四十二條第五項に規定する七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、一万五百円)以上)のものに限る。)を合算した額

イ 一部負担金の額

ロ 当該療養が法第六十三條第二項第三号に規定する評価療養、同項第四号に規定する患者申出療養又は同項第五号に規定する選定療養を含む場合における一部負担金の額に法第八十六條第二項第一号に規定する厚生労働大臣が定めるところにより算定した費用の額(その額が現に当該療養に要した費用の額を超えるときは、現に当該療養に要した費用の額)から当該療養に要した費用に要した費用の額)から当該療養に要した費用に要した費用として支給される額に相当する額を控除した額

ハ 当該療養につき算定した費用の額(その額が現に当該療養に要した費用の額を超えるときは、現に当該療養に要した費用の額)から当該療養に要した費用に要した費用として支給される額に相当する額を控除した額

ニ 法第八十八條第四項に規定する厚生労働大臣が定めるところにより算定した費用の額からその指定訪問看護に要した費用につき訪問看護療養費として支給される額に相当する額を控除した額

ホ 当該療養につき算定した費用の額(その額が現に当該療養に要した費用の額を超えるときは、現に当該療養に要した費用の額)から当該療養に要した費用に要した費用(法第九十條第七項において準用する法第八十七條第一項の規定により家族療養費に代えて支給される療養費を含む。)として支給される額に相当する額を控除した額

ヘ 法第九十一條第二項の規定により算定した費用の額からその指定訪問看護に要した費用に要した費用に要した費用として支給される額に相当する額を控除した額

二 被保険者又はその被扶養者が前号の月にそれぞれ一の病院等から受けた特定給付

対象療養(原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律(平成六年法律第十七号)による一般疾病医療費(第四十三條第五項において「原爆一般疾病医療費」といふ。))の支給その他厚生労働省令で定める医療に関する給付が行われるべき療養及び当該被保険者又はその被扶養者が第九項の規定による保険者の認定を受けた場合における同項に規定する療養を受けようとするもの(以下「特定給付対象療養」といふ。))に於いて、当該被保険者又はその被扶養者が前号イからへまでに掲げる額が二万円(第四十二條第五項に規定する七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、一万五百円)以上)のものに限る。)を合算した額

二 被保険者の被扶養者が療養(第四十二條第五項に規定する七十五歳到達時特例対象療養であつて、七十歳に達する日の属する月以前のものに限る。)を受けた場合において、当該被扶養者が同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該療養に係る次に掲げる額を当該被扶養者ごとにそれぞれ合算した額が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該それぞれ合算した額から高額療養費算定基準額を控除した額(以下この項において「一部負担金等世帯合算額」といふ。)が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該七十歳以上一部負担金等世帯合算

一 被扶養者が受けた当該療養(特定給付対象療養を除く。)に係る前項第一号イからへまでに掲げる額(一万五百円以上)のものに限る。)を合算した額

二 被扶養者が受けた当該療養(特定給付対象療養に限る。)について、当該被扶養者がなお負担すべき額(当該特定給付対象療養に係る前項第一号イからへまでに掲げる額が一萬五百円以上)のものに限る。)を合算した額

被保険者又はその被扶養者が療養(七十歳に達する日の属する月の翌月以後の療養に限る。第五項において同じ。)を受けた場合において、当該被保険者又はその被扶養者が同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該療養に係る次に掲げる額を合算した額から次項又は第五項の規定により支給される高額療養費の額を控除した額(以下この項及び附則第二條第二項第一号において「七十歳以上一部負担金等世帯合算額」といふ。)が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該七十歳以上一部負担金等世帯合算

一 被扶養者が受けた当該療養(特定給付対象療養を除く。)に係る前項第一号イからへまでに掲げる額(一万五百円以上)のものに限る。)を合算した額

二 被扶養者が受けた当該療養(特定給付対象療養に限る。)について、当該被扶養者がなお負担すべき額(当該特定給付対象療養に係る前項第一号イからへまでに掲げる額が一萬五百円以上)のものに限る。)を合算した額

被保険者又はその被扶養者が療養(七十歳に達する日の属する月の翌月以後の療養に限る。第五項において同じ。)を受けた場合において、当該被保険者又はその被扶養者が同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該療養に係る次に掲げる額を合算した額から次項又は第五項の規定により支給される高額療養費の額を控除した額(以下この項及び附則第二條第二項第一号において「七十歳以上一部負担金等世帯合算額」といふ。)が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該七十歳以上一部負担金等世帯合算

算額から高額療養費算定基準額を控除した額を
 高額療養費として支給する。
 一 被保険者又はその被扶養者が受けた当該療
 養（特定給付対象療養を除く。）に係る第一
 項第一号イからへまでに掲げる額を合算し
 た額

二 被保険者又はその被扶養者が受けた当該療
 養（特定給付対象療養に限る。）について、
 当該被保険者又はその被扶養者がなお負担す
 べき額を合算した額

四 被保険者が第一号に掲げる療養を受けた場合
 又はその被扶養者が第二号に掲げる療養若しく
 は第三号に掲げる療養（七十歳に達する日の属
 する月の翌月以後の療養に限る。）を受けた場
 合において、当該被保険者又はその被扶養者が
 同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該
 療養に係る前項第一号及び第二号に掲げる額を
 当該被保険者又はその被扶養者ごとにそれぞれ
 合算した額から次項の規定により支給される高
 額療養費の額をそれぞれ控除した額が高額療養
 費に係る額を超えるときは、当該それぞれ控
 除した額から高額療養費算定基準額を控除した
 額の合算額を高額療養費として支給する。

一 高齢者の医療の確保に関する法律第五十二
 条第一号に該当し、月の初日以外の日におい
 て同法第五十条の規定による被保険者（以下
 「後期高齢者医療の被保険者」という。）の資
 格を取得したことにより健康保険の被保険者
 の資格を喪失した者（第三号において「七十
 五歳到達前旧被保険者」という。）が、同日
 の前日の属する月（同日以前の期間に限る。
 第三号において「旧被保険者七十五歳到達
 月」という。）を受けた療養

二 高齢者の医療の確保に関する法律第五十二
 条第一号に該当し、月の初日以外の日におい
 て後期高齢者医療の被保険者の資格を取得し
 たことにより被扶養者でなくなった者が、同
 日の前日の属する月（同日以前の期間に限
 る。）を受けた療養

三 七十五歳到達前旧被保険者の被扶養者であ
 った者（当該七十五歳到達前旧被保険者が後
 期高齢者医療の被保険者の資格を取得したこ
 とによりその被扶養者でなくなった者に限
 る。）が、当該七十五歳到達前旧被保険者に
 係る旧被保険者七十五歳到達月に受けた療養
 被保険者（法第七十四条第一項第三号の規定
 が適用される者である場合を除く。）又はその

被扶養者が療養（外来療養（法第六十三条第一
 項第一号から第四号までに掲げる療養（同項第
 五号に掲げる療養に伴うものを除く。）をいう。
 次条並びに第四十二条第六項第三号、第七項第
 三号及び第八項第三号において同じ。）に限
 る。）を受けた場合において、当該被保険者又は
 その被扶養者が同一の月にそれぞれ一の病院等
 から受けた当該療養に係る第三項第一号及び第
 二号に掲げる額を当該被保険者又はその被扶養
 者ごとにそれぞれ合算した額が高額療養費算定
 基準額を超えるときは、当該それぞれ合算した
 額から高額療養費算定基準額を控除した額の合
 算額を高額療養費として支給する。

六 被保険者又はその被扶養者が特定給付対象療
 養（当該被保険者又はその被扶養者が次項の規
 定による保険者の認定を受けた場合における同
 項に規定する特定疾病給付対象療養及び当該被
 保険者又はその被扶養者が第九項の規定による
 保険者の認定を受けた場合における同項に規定
 する療養を除く。）を受けた場合において、当
 該被保険者又はその被扶養者が同一の月にそれ
 ぞれ一の病院等から受けた当該特定給付対象療
 養に係る第一項第一号イからへまでに掲げる額
 が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該
 同号イからへまでに掲げる額から高額療養費算
 定基準額を控除した額を高額療養費として支給
 する。

七 被保険者又はその被扶養者が特定疾病給付対
 象療養（特定給付対象療養（当該被保険者又は
 その被扶養者が第九項の規定による保険者の認
 定を受けた場合における同項に規定する療養を
 除く。）のうち、治療方法が確立していない疾
 病その他の疾病であつて、当該疾病にかかると
 により長期にわたり療養を必要とすることと
 なるもの当該療養に必要な費用の負担を軽減
 するための医療に関する給付として厚生労働大
 臣が定めるものが行われるべきものをいう。第
 四十二条第七項において同じ。）を受けた場合
 において、当該特定疾病給付対象療養を受けた
 被保険者又はその被扶養者が厚生労働省令で定
 めるところにより保険者の認定を受けたもので
 あり、かつ、当該被保険者又はその被扶養者が
 同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該
 特定疾病給付対象療養に係る第一項第一号イか
 らへまでに掲げる額が高額療養費算定基準額を
 超えるときは、当該同号イからへまでに掲げる
 額から高額療養費算定基準額を控除した額を高
 額療養費として支給する。

八 被保険者又はその被扶養者が生活保護法（昭
 和二十五年法律第四十四号）第六条第一項に
 規定する被保護者である場合において、当該被
 保険者又はその被扶養者が同一の月にそれぞ
 れ一の病院等から受けた療養（食事療養、生活療
 養及び特定給付対象療養を除く。）に係る第一
 項第一号イからへまでに掲げる額が高額療養費
 算定基準額を超えるときは、当該同号イからへ
 までに掲げる額から高額療養費算定基準額を控
 除した額を高額療養費として支給する。

九 被保険者又はその被扶養者が次のいずれにも
 該当する疾病として厚生労働大臣が定めるもの
 に係る療養（食事療養及び生活療養を除く。）
 を受けた場合において、当該療養を受けた被保
 険者又はその被扶養者が厚生労働省令で定める
 ところにより保険者の認定を受けたものであ
 り、かつ、当該被保険者又はその被扶養者が同
 一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該療
 養に係る第一項第一号イからへまでに掲げる額
 が高額療養費算定基準額を超えるときは、当該
 同号イからへまでに掲げる額から高額療養費算
 定基準額を控除した額を高額療養費として支給
 する。

一 費用が著しく高額な一定の治療として厚生
 労働大臣が定める治療を要すること。
 二 前号に規定する治療を著しく長期間にわた
 り継続しなければならないこと。

第四十一条の二 高額療養費は、第一号から第六
 号までに掲げる額を合算した額（以下この項に
 おいて「基準日被保険者合算額」という。）、第
 七号から第十二号までに掲げる額を合算した額
 （以下この項において「基準日被扶養者合算額」
 という。）又は第十三号から第十八号までに掲
 げる額を合算した額（以下この項において「元
 被扶養者合算額」という。）のいずれかが高額
 療養費算定基準額を超える場合に第一号に規定
 する基準日被保険者に支給するものとし、その
 額は、基準日被保険者合算額から高額療養費算
 定基準額を控除した額（当該額が零を下回る場
 合には、零とする。）に高額療養費算分率（同
 号に掲げる額を、基準日被保険者合算額で除し
 て得た率をいう。）を乗じて得た額、基準日被
 扶養者合算額から高額療養費算定基準額を控除
 した額（当該額が零を下回る場合には、零とす
 る。）に高額療養費算分率（第七号に掲げる額
 を、基準日被扶養者合算額で除して得た率をい

う。）を乗じて得た額及び元被扶養者合算額か
 ら高額療養費算定基準額を控除した額（当該額
 が零を下回る場合には、零とする。）に高額療
 養費算分率（第十三号に掲げる額を、元被扶養
 者合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得
 た額の合算額とする。ただし、当該基準日被保
 険者が基準日（計算期間（毎年八月一日から翌
 年七月三十一日までの期間をいう。以下同じ。）
 の末日をいう。以下同じ。）において法第七十
 四条第一項第三号の規定が適用される者である
 場合は、この限りでない。

一 計算期間（基準日において当該被保険者の被
 保険者（日雇特別被保険者、国家公務員共済
 組合法及び地方公務員等共済組合法に基づく
 共済組合の組合員並びに私立学校教職員共済
 法の規定による私立学校教職員共済制度の加
 入者を除く。以下この条、第四十三条第十一
 項及び第四十三条の二から第四十三条の四ま
 だにおいて同じ。）である者（以下この条並
 びに第四十三条の二第一項、第二項、第五項
 及び第七項において「基準日被保険者」とい
 う。）が当該被保険者の被保険者であつた間に
 限る。）において、当該基準日被保険者が当
 該被保険者の被保険者（法第七十四条第一項第
 三号の規定が適用される者である場合を除
 く。）として受けた外来療養（七十歳に達す
 る日の属する月の翌月以後の外来療養に限
 る。以下この条において同じ。）（法第九十八
 条第一項（法第一百零七項及び第一百十一条
 第三項において準用する場合を含む。）の規
 定による保険給付に係る外来療養（以下この
 条において「継続給付に係る外来療養」とい
 う。）を含む。）に係る次に掲げる額の合算額
 （前条第一項から第五項までの規定により高
 額療養費が支給される場合にあつては、当該
 者に係る支給額を控除した額とし、法第五十
 三条に規定するその他の給付として次に掲げ
 る額に係る負担を軽減するための金品が支給
 される場合にあつては、当該者に係る当該金
 品に相当する額を控除した額とする。）
 イ 当該外来療養（特定給付対象療養を除
 く。）に係る前条第一項第一号イからへま
 だに掲げる額を合算した額
 ロ 当該外来療養（特定給付対象療養に限
 る。）について、当該者がなお負担すべき
 額

二 計算期間（基準日被保険者が他の健康保険
 の被保険者の被保険者であつた間に限る。）に

	健康保険の保険者の被保険者である者に限る。） に対する高額療養費の支給について準用する。 この場合において、次の表の上欄に掲げる規定 中同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の 下欄に掲げる字句に読み替えるものとする。
第七号に掲げる	第八号に掲げる額のうち、計算期間（第三項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった間に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第八号に規定する外来療養に係る
第十三号に掲げる	第十四号に掲げる額のうち、計算期間（第三項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、当該同項に規定する者の被扶養者であった者（当該基準日被扶養者を除く。））が当該同項に規定する者の被扶養者であった者（当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十四号に規定する外来療養に係る

第一項（毎年八月の末日） ただし、翌年七月三十一日までの期間をいう。 以下同じ。	第一項（毎年八月の末日） 第三号に規定する者（法第七十四号条第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第八号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る	第一項（毎年八月の末日） 第十号に掲げる額のうち、計算期間（第四項に規定する者が当該被保険者の被保険者であり、かつ、第三号に規定する基準日被扶養者が当該同項に規定する者の被扶養者であった者に限る。）において、当該基準日被扶養者が当該基準日被扶養者（法第百十号条第二項第一号二の規定が適用される者である場合を除く。）として受けた第十号に規定する外来療養に係る
--	--	---	---	---	---	---	---

第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号
第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号

第十三号	第十六号	第十号	第七号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号
第十三号	第十六号	第十号	第七号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号	第十四号	第十五号	第十六号	第四項	第七号	第十号

労働省令で定めるとし、費算者医療被保険者を
るにより算定した第一定 基準日被扶養者と
項第十三号から第十八準 額それぞれみなして
号まで掲げる額に相 控厚生労働省令で定
当する額を合算した額除 しめるところにより
(以下この表において「額 算定した第一項第
二元被扶養者合算額」という。)

十三号に掲げる額
に相当する額を、
元被扶養者合算額
で除して得た率

8 第一項(第二項から第四項までにおいて準用する場合を含む)、第五項(第六項において準用する場合を含む)及び第六項において「組合等」とは、法第二百二十三条第一項の規定による保険者としての全国健康保険協会、船員保険法の規定により医療に関する給付を行う全国健康保険協会、市町村(特別区を含む)、国民健康保険組合、国家公務員共済組合法若しくは地方公務員等共済組合法に基づく共済組合、日本私立学校振興・共済事業団又は高齢者の医療の確保に関する法律に基づく後期高齢者医療広域連合をいう。

9 第一項(第二項から第四項までにおいて準用する場合を含む)、第五項(第六項において準用する場合を含む)及び第六項において「組合員等」とは、日雇特別被保険者(日雇特別被保険者であった者(法第二百二十六条の規定により日雇特別被保険者手帳の交付を受け、その手帳に健康保険印紙を貼り付けるべき余白がなくなるに至るまでの間にある者に限り、法第三条第二項ただし書の規定による承認を受けて同項の規定による日雇特別被保険者とならない期間内にある者又は法第二百二十六条第三項の規定により当該日雇特別被保険者手帳を返納した者を除く。)を含む。次項、第四十三条の第三項及び第四十四条第二項から第七項までにおいて同じ)、船員保険の被保険者、国家公務員共済組合法若しくは地方公務員等共済組合法に基づく共済組合の組合員、私立学校教職員共済法の規定による私立学校教職員共済制度の加入者、国民健康保険の被保険者の属する世帯の世帯主若しくは国民健康保険組合の組合員(以下「国民健康保険の世帯主等」という。)又は後期高齢者医療の被保険者をいう。

10 第一項(第二項から第四項までにおいて準用する場合を含む)、第五項(第六項において準用する場合を含む)及び第六項において「被

扶養者等」とは、日雇特別被保険者の被扶養者若しくは船員保険法、国家公務員共済組合法(他の法律において準用する場合を含む)若しくは地方公務員等共済組合法の規定による被扶養者又は国民健康保険の世帯主等同一の世帯に属する当該国民健康保険の世帯主等以外の国民健康保険の被保険者をいう。
(高額療養費算定基準額)
第四十二条 第四十一条第一項の高額療養費算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。

一 次号から第五号までに掲げる者以外の者
八万百円と、第四十一条第一項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が二十万七千円に満たないときは、二十万七千円)から二十万七千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、当該療養のあった月の標準報酬月額が八十三万円以上の被保険者又はその被扶養者(二十五万二千六百円と、第四十一条第一項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が八十四万二千円に満たないときは、八十四万二千円)から八十四万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、十四万百円とする。

二 療養のあった月の標準報酬月額が八十三万円以上の被保険者又はその被扶養者(二十五万二千六百円と、第四十一条第一項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が八十四万二千円に満たないときは、八十四万二千円)から八十四万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、十四万百円とする。

三 療養のあった月の標準報酬月額が五十三万円以上八十三万円未満の被保険者又はその被

扶養者(十六万七千四百円と、第四十一条第一項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が五十五万八千円に満たないときは、五十五万八千円)から五十五万八千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、九万三千円とする。

四 療養のあった月の標準報酬月額が二十八万円未満の被保険者又はその被扶養者(次号に掲げる者を除く。)五万七千六百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

五 市町村村民税非課税者(療養のあった月の属する年度(療養のあった月が四月から七月までの場合にあつては、前年度)分の地方税法(昭和二十五年法律第二百二十六号)の規定による市町村村民税(同法の規定による特別区民税を含むものとし、同法第三百二十八条の規定によって課する所得割を除く。第四十三条の第三項第五号において同じ)が課されない者(市町村(特別区を含む)同号において同じ)の条例で定めるところにより当該市町村村民税を免除された者を含むものとし、当該市町村村民税の賦課期日において同法の施行地に住所を有しない者を除く。)をいう。第三項第五号において同じ)である被保険者若しくはその被扶養者又は療養のあった月において要保護者(生活保護法第六条第二項に規定する要保護者をいう。第三項において同じ)である者であつて厚生労働省令で定めるものに該当する被保険者若しくはその被扶養者(第二号及び第三号に掲げる者を除く。)三万五千四百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万四千六百円とする。

2 第四十一条第二項の高額療養費算定基準額は、当該被扶養者に係る次の各号に掲げる被保険者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。

一 次号から第五号までに掲げる被保険者以外
の被保険者(四万五千円と、第四十一条第二

項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が十三万三千五百円に満たないときは、十三万三千五百円)から十三万三千五百円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

二 前項第二号に規定する被保険者(十二万六千三百円と、第四十一条第二項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が四十二万二千円に満たないときは、四十二万二千円)から四十二万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、七万五千円とする。

三 前項第三号に規定する被保険者(八万三千七百円と、第四十一条第二項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額(その額が二十七万九千円に満たないときは、二十七万九千円)から二十七万九千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額(この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額)との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万六千五百円とする。

四 前項第四号に規定する被保険者(二万八千八百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

五 前項第五号に規定する被保険者(一万七千七百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、一万二千三百円とする。

3 第四十一条第三項の高額療養費算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。

一 次号から第六号までに掲げる者以外の者は、五万七千六百円。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

二 法第七十四条第一項第三号の規定が適用される者であつて療養のあつた月の標準報酬月額が八十三万円以上の被保険者又はその被扶養者 二十五万二千六百円と、第四十一条第三項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が八十四万二千円に満たないときは、八十四万二千円）から八十四万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、十四万九千円とする。

三 法第七十四条第一項第三号の規定が適用される者であつて療養のあつた月の標準報酬月額が五十三万円以上八十三万円未満の被保険者又はその被扶養者 十六万七千四百円と、第四十一条第三項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が五十五万八千円に満たないときは、五十五万八千円）から五十五万八千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、九万三千円とする。

四 法第七十四条第一項第三号の規定が適用される者であつて療養のあつた月の標準報酬月額が五十三万円未満の被保険者又はその被扶養者 八万九千円と、第四十一条第三項第一号及び第二号に掲げる額を合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額

が二十六万七千円に満たないときは、二十六万七千円）から二十六万七千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

五 市町村民税非課税者である被保険者若しくはその被扶養者又は療養のあつた月において要保護者である者であつて厚生労働省令で定めるものに該当する被保険者若しくはその被扶養者（前三号又は次号に掲げる者を除く。） 二万四千六百円

六 被保険者及びその被扶養者の全てが療養のあつた月の属する年度（療養のあつた月が四月から七月までの場合にあつては、前年度）の地方税法の規定による市町村民税（同法の規定による特別区民税を含む。第四十三条の三第二項第六号において同じ。）に係る同法第三百三十三条第一項に規定する総所得金額及び山林所得金額に係る所得税法（昭和二十年法律第三十三号）第二条第一項第二十二号に規定する各種所得の金額（同法第三十五条第二項に規定する公的年金等の支給を受ける者については、同条第四項中「次の各号に掲げる場合の区分に応じ当該各号に定める金額」とあるのは「八十万円」として同項の規定を適用して算定した総所得金額とし、総所得金額に同法第二十八条第一項に規定する給与所得が含まれている場合においては、当該給与所得については、同条第二項の規定による金額（当該金額から十万円を控除して得た金額（当該金額が零を下回る場合には、零とする。）によるものとする。第四十三条の三第二項第六号において同じ。）並びに他の所得と区分して計算される所得の金額（地方税法附則第三十三条の二第五項に規定する上場株式等に係る配当所得等の金額（同法附則第三十五条の二の六第十一項又は第十五項の規定の適用がある場合には、その適用後の金額）、同法附則第三十三条の三第五項に規定する土地等に係る事業所得等の金額、同法附則第三十四条第四項に規定する長期譲渡所得の金額（租税特別措置法（昭和三十三年法律第二十六号）第三十三条の四第一項若しくは

第二項、第三十四条第一項、第三十四条の二第一項、第三十五条の二第一項、第三十五条の三第一項又は第三十六条の規定の適用がある場合には、これらの規定の適用により同法第三十一条第一項に規定する長期譲渡所得の金額から控除する金額を控除した金額）、地方税法附則第三十五条第五項に規定する短期譲渡所得の金額（租税特別措置法第三十三条の四第一項若しくは第二項、第三十四条第一項、第三十四条の二第一項又は第三十六条の規定の適用がある場合には、これらの規定の適用により同法第三十一条第一項に規定する長期譲渡所得の金額を控除する金額）、地方税法附則第三十五条の二の二第五項に規定する一般株式等に係る譲渡所得等の金額（同法附則第三十五条の三第十五項の規定の適用がある場合には、その適用後の金額）、同法附則第三十五条の二の二第五項に規定する上場株式等に係る譲渡所得等の金額（同法附則第三十五条の二の六第十五項又は第三十五条の三第十三項若しくは第十五項の規定の適用がある場合には、その適用後の金額）、同法附則第三十五条の四第四項に規定する先物取引に係る雑所得等の金額（同法附則第三十五条の四の二第七項の規定の適用がある場合には、その適用後の金額）、外国居住者等の所得に対する相互主義による所得税等の非課税等に関する法律（昭和三十七年法律第四十四号）第八条第二項（同法第十二条第五項及び第十六条第二項において準用する場合を含む。）に規定する特例適用配当等の額、租税条約等の実施に伴う所得税法、法人税法及び地方税法の特例等に関する法律（昭和四十四年法律第四十六号）第三条の二の二第十項に規定する条約適用配当等の額及び同条第十二項に規定する条約適用配当等の額をいう。第四十三条の三第二項第六号において同じ。）がない被保険者若しくはその被扶養者又は療養のあつた月において要保護者である者であつて厚生労働省令で定めるものに該当する被保険者若しくはその被扶養者（第二号から第四号までに掲げる者を除く。） 一万五千円

4 第四十一条第四項の高額療養費算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。

一 前項第一号に掲げる者 二万八千八百円。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

二 前項第二号に掲げる者 十二万六千三百円と、第四十一条第四項に規定する合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が四十二万二千円に満たないときは、四十二万二千円）から四十二万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、七万五千円とする。

三 前項第三号に掲げる者 八万三千七百円と、第四十一条第四項に規定する合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が二十七万九千円に満たないときは、二十七万九千円）から二十七万九千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、四万六千五百円とする。

四 前項第四号に掲げる者 四万五千円と、第四十一条第四項に規定する合算した額に係る療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が十三万三千五百円に満たないときは、十三万三千五百円）から十三万三千五百円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回数該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

五 前項第五号に掲げる者 一万二千三百円

六 前項第六号に掲げる者 七千五百円

つては、四万五千円」と、第四十一条第一項第一号イからへまでに掲げる額に係る特定疾病給付対象療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該特定疾病給付対象療養に要した費用の額（その額が二十六万七千円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、十三万三千五百円。以下この二において同じ。）に満たないときは、二十六万七千円）から二十六万七千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、特定疾病給付対象療養高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、二万二千二百円）とする。

ホ 第三項第五号に掲げる者 二万四千六百円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、一万二千三百円）

ヘ 第三項第六号に掲げる者 一万五千元（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、七千五百円）

三 七十歳に達する日の属する月の翌月以後の特定疾病給付対象療養であつて、外来療養である場合 次のイ又はロに掲げる者の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める額（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、それぞれイ又はロに定める額に二分の一を乗じて得た額）

イ 第三項第一号に掲げる者 一万八千円

ロ 第三項第五号又は第六号に掲げる者 八千円

千円

八 第四十一条第八項の高額療養費算定基準額は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定める額（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、当該各号に定める額に二分の一を乗じて得た額）とする。

一 次号又は第三号に掲げる場合以外の場合 三万五千四百円

二 七十歳に達する日の属する月の翌月以後の第四十一条第八項に規定する療養であつて、入院療養である場合 一万五千元

三 七十歳に達する日の属する月の翌月以後の第四十一条第八項に規定する療養であつて、外来療養である場合 八千円

九 第四十一条第九項の高額療養費算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、当該各号に定める額に二分の一を乗じて得た額）とする。

一 次号に掲げる者以外の者 一万円

二 第一項第二号又は第三号に掲げる者（七十歳に達する日の属する月の翌月以後に第四十一条第九項に規定する療養を受けた者及び同項に規定する療養のうち国が費用を負担すべき療養に係る疾病として厚生労働大臣が定めるものに係る療養を受けた者を除く。） 二万円

10 前条第一項（同条第二項から第四項までにおいて準用する場合を含む。）、第五項（同条第六項において準用する場合を含む。）及び第七項の高額療養費算定基準額は、それぞれ十四万四千円とする。

（その他高額療養費の支給に関する事項）

第四十三条 被保険者が同一の月に一の保険医療機関若しくは保険薬局若しくは法第六十三条第三項第二号に掲げる病院若しくは診療所若しくは薬局（以下この項及び第五項において「保険医療機関等」と総称する。）又は指定訪問看護事業者から療養を受けようとする場合において、法の規定により支払うべき一部負担金、保険外併用療養費負担額（保険外併用療養費の支給につき法第八十六条第四項において準用する法第八十五条第五項又は第七項の規定の適用がある場合における当該保険外併用療養費の支給に係る療養につき算定した費用の額から当該保険外併用療養費の額を控除した額をいう。以下この項及び第五項において同じ。）又は訪問看護療養費負担額（訪問看護療養費の支給につき法第八十八条第六項の規定の適用がある場合における当該訪問看護療養費の支給に係る指定訪問看護につき算定した費用の額から当該訪問看護療養費の額を控除した額をいう。以下この項及び第五項において同じ。）の支払が行われなかつたときは、保険者は、第四十一条第一項及び第三項から第五項までの規定による高額療養費について、当該一部負担金の額、保険外併用療養費負担額又は訪問看護療養費負担額から次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定める額を控除した額の限度において、当該保険医療機関等又は指定訪問看護事業者に支払うものとする。

一 第四十一条第一項の規定により高額療養費を支給する場合 次のイからホまでに掲げる者の区分に応じ、それぞれイからホまでに定める額

イ 前条第一項第一号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 八万百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が二十六万七千円に満たないときは、二十六万七千円）から二十六万七千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

ロ 前条第一項第二号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 二十五万二千六百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が八万四千二百円に満たないときは、八万四千二百円）から八万四千二百円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、十四万百円とする。

ハ 前条第一項第三号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 十六万七千四百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が五十五万八千円に満たないときは、五十五万八千円）から五十五万八千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算

額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、九万三千円とする。

ニ 前条第一項第四号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 五万七千六百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

ホ 前条第一項第五号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 三万五千四百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万四千六百円とする。

二 第四十一条第三項の規定により高額療養費を支給する場合 次のイからへまでに掲げる者の区分に応じ、それぞれイからへまでに定める額

イ ロからへまでに掲げる者以外の者 五万七千六百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

ロ 前条第三項第二号に掲げる者 二十五万二千六百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が八万四千二百円に満たないときは、八万四千二百円）から八万四千二百円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、十四万百円とする。

ハ 前条第三項第三号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 十六万七千四百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が五十五万八千円に満たないときは、五十五万八千円）から五十五万八千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算

は、これを一円に切り上げた額」との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、九万三千円とする。

二 前条第三項第四号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者

八万百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が二十六万七千円に満たないときは、二十六万七千円）から二十六万七千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、これを切り捨て、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。

ホ 前条第三項第五号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者

二万四千六百円

ヘ 前条第三項第六号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者

一萬五千円

三 第四十一条第四項の規定により高額療養費を支給する場合 次のイからへまでに掲げる者の区分に応じ、それぞれイからへまでに定める額

イ ロからへまでに掲げる者以外の者 二万八千八百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

ロ 前条第四項第二号に掲げる者 十二万六千三百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が四十二万二千円に満たないときは、四十二万二千円）から四十二万二千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、七万五千円とする。

ハ 前条第四項第三号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 八万三千七百円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が二十七万九千円に満たないときは、二十七万九千円）から二十七万九千円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万六千五百円とする。

二 前条第四項第四号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 四万五千円と、当該療養につき厚生労働省令で定めるところにより算定した当該療養に要した費用の額（その額が十三万三千五百円に満たないときは、十三万三千五百円）から十三万三千五百円を控除した額に百分の一を乗じて得た額（この額に一円未満の端数がある場合においては、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円に切り上げた額）との合算額。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。

ホ 前条第四項第五号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 一萬二千三百円

ヘ 前条第四項第六号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 七千五百円

四 第四十一条第五項の規定により高額療養費を支給する場合 次のイ又はロに掲げる者の区分に応じ、それぞれイ又はロに定める額

イ ロに掲げる者以外の者 一萬八千円

ロ 前条第五項第二号に掲げる者に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けている者 八千円

五 前項の規定による支払があつたときは、その限度において、被保険者に対し第四十一条第一

項及び第三項から第五項までの規定による高額療養費の支給があつたものとみなす。

三 法第一百条第四項から第六項までの規定は、家族療養費に係る療養についての第四十一条第一項から第五項までの規定による高額療養費の支給（家族療養費負担額（家族療養費の支給につき法第一百条第四項又は第六項の規定の適用がある場合における当該家族療養費の支給に係る療養につき算定した費用の額から当該家族療養費の額を控除した額をいう。）から第一項各号に掲げる場合については当該場合の区分に応じ当該各号に定める額を、第四十一条第二項の規定により高額療養費を支給する場合であつて前条第二項各号のいずれかに掲げる区分に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けているときについては当該区分に応じ当該各号に定める額を控除した額を限度とするものに限る。）について準用する。この場合において、法第八十八条第六項中「被保険者が」とあるのは、「被扶養者が」と読み替へるものとする。

四 法第八十八条第六項及び第七項の規定は、家族訪問看護療養費に係る指定訪問看護についての第四十一条第一項から第五項までの規定による高額療養費の支給（家族訪問看護療養費負担額（家族訪問看護療養費の支給につき法第一百条第六項の規定の適用がある場合における当該家族訪問看護療養費の額を控除した額をいう。）から第一項各号に掲げる場合については当該場合の区分に応じ当該各号に定める額を、第四十一条第二項の規定により高額療養費を支給する場合であつて前条第二項各号のいずれかに掲げる区分に該当していることにつき厚生労働省令で定めるところにより保険者の認定を受けているときについては当該区分に応じ当該各号に定める額を控除した額を限度とするものに限る。）について準用する。この場合において、法第八十八条第六項中「被保険者が」とあるのは、「被扶養者が」と読み替へるものとする。

五 被保険者が保険医療機関等若しくは指定訪問看護事業者から原爆一般疾病医療費の支給その他厚生労働省令で定める医療に関する給付が行われるべき療養を受けた場合、第四十一条第八項の規定に該当する被保険者が保険医療機関等若しくは指定訪問看護事業者から同項に規定する療養を受けた場合又は同条第九項の規定によ

る被保険者の認定を受けた被保険者が保険医療機関等若しくは指定訪問看護事業者から同項に規定する療養を受けた場合において、法の規定により支払うべき一部負担金、保険外併用療養費負担額又は訪問看護療養費負担額の支払が行われなかったときは、被保険者は、当該療養に要した費用のうち同条第六項から第九項までの規定による高額療養費として被保険者に支給すべき額に相当する額を当該保険医療機関等又は指定訪問看護事業者に支払うものとする。

六 前項の規定による支払があつたときは、被保

険者に対し第四十一条第六項から第九項までの規定による高額療養費の支給があつたものとみなす。

七 法第一百条第四項から第六項までの規定は、家族療養費に係る療養についての第四十一条第六項から第九項までの規定による高額療養費の支給について準用する。この場合において、法第一百条第四項及び第六項中「療養を」とあるのは「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律（平成六年法律第十七号）による一般疾病医療費の支給その他厚生労働省令で定める医療に関する給付が行われるべき療養を」とし、「療養に」とあるのは「その療養に」と読み替へるものとする。

八 法第八十八条第六項及び第七項の規定は、家族訪問看護療養費に係る指定訪問看護についての第四十一条第六項から第九項までの規定による高額療養費の支給について準用する。この場合において、法第八十八条第六項中「被保険者が」とあるのは「被扶養者が」とし、「指定訪問看護を」とあるのは「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律（平成六年法律第十七号）による一般疾病医療費の支給その他厚生労働省令で定める医療に関する給付が行われるべき指定訪問看護を」と読み替へるものとする。

九 歯科診療及び歯科診療以外の診療を併せ行う保険医療機関は、第四十一条の規定の適用については、歯科診療及び歯科診療以外の診療につきそれぞれ別個の保険医療機関とみなす。

十 被保険者又はその被扶養者が同一の月にそれぞれ一の保険医療機関から法第六十三条第一項第五号に掲げる療養を含む療養及びそれ以外の療養を受けた場合は、第四十一条の規定の適用については、当該号に掲げる療養を含む療養及びそれ以外の療養は、それぞれ別個の保険医療機関から受けたものとみなす。

11 被保険者が計算期間においてその資格を喪失し、かつ、当該資格を喪失した日以後の当該計算期間において医療保険加入者（高齢者の医療の確保に関する法律第七条第四項に規定する加入者又は後期高齢者医療の被保険者をいう。第四十三条の四第一項並びに第四十四条第四項及び第七項において同じ。）とならない場合その他厚生労働省令で定める場合における第四十一条の二の規定による高額療養費の支給については、当該日の前日（当該厚生労働省令で定める日）を基準日とみなして、同条及び前条第十項の規定を適用する。

12 高額療養費の支給に関する手続に關して必要な事項は、厚生労働省令で定める。

（高額介護合算療養費の支給要件及び支給額）
第四十三条の二 高額介護合算療養費は、次に掲げる額を合算した額から七十歳以上介護合算支給総額（次項の七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額から同項の七十歳以上介護合算算定基準額を控除した額（当該額が高額介護合算療養費の支給の事務の執行に要する費用を勘案して厚生労働大臣が定める支給基準額（以下この条において「支給基準額」という。）以下である場合又は当該七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額の算定につき同項ただし書に該当する場合には、零とする。）をいう。）を控除した額（以下この項において「介護合算一部負担金等世帯合算額」という。）が介護合算算定基準額に支給基準額を加えた額を超える場合に基準日被保険者に支給するものとし、その額は、介護合算一部負担金等世帯合算額から介護合算算定基準額を控除した額に介護合算按分率（第一号に掲げる額から次項の規定により支給される高額介護合算療養費の額を控除した額を、介護合算一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得た額とする。ただし、同号から第五号までに掲げる額を合算した額又は第六号及び第七号に掲げる額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

一 計算期間において、基準日被保険者又はその被扶養者がそれぞれ当該被保険者の被保険者又はその被扶養者として受けた療養（法第九十八条第一項（法第一百十條第七項及び第九十八条第三項において準用する場合を含む。）の規定による保険給付に係る療養（以下この条において「継続給付に係る療養」という。）を含む。）に係る次に掲げる額の合算額（第四十一条第一項から第五項まで又は第四十一条の二の規定により高額療養費が支給される場合にあっては、当該支給額を控除した額とし、法第五十三条に規定するその他の給付として次に掲げる額に係る負担を軽減するため金品が支給される場合にあっては、当該金品に相当する額を控除した額とする。）
 イ 当該療養（特定給付対象療養を除く。）に係る第四十一条第一号イからへまでに掲げる額（七十歳に達する日の属する月以前の当該療養に係るものにあつては、同月の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該療養について二万円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、一万五百円）以上のものに限る。）を合算した額
 ロ 当該療養（特定給付対象療養に限る。）について、当該療養を受けた者がなお負担すべき額（七十歳に達する日の属する月以前の特定給付対象療養に係るものにあつては、当該特定給付対象療養に係る第四十一条第一項第一号イからへまでに掲げる額が同一の月にそれぞれ一の病院等から受けた当該特定給付対象療養について二万円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、一万五百円）以上のものに限る。）を合算した額
 二 基準日被保険者が計算期間における他の健康保険の被保険者であった間に、当該者が受けた療養又はその被扶養者であった者がその被扶養者であつた間に受けた療養に係る前号に規定する合算額
 三 基準日被保険者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた者がその被扶養者であつた間に受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）に係る第一号に規定する合算額
 四 基準日被保険者が計算期間における他の健康保険の被保険者であった間に、当該者が受けた療養又はその被扶養者であつた者がその被扶養者であつた間に受けた療養に係る第一号に規定する合算額
 五 基準日被保険者又は基準日被扶養者が計算期間における組合員等（第四十一条の二第九項に規定する組合員等をいう。以下この号及

び第五項において同じ。）であつた間に、当該組合員等が受けた療養（前各号に規定する療養を除く。）又はその被扶養者等（同条第十項に規定する被扶養者等をいう。以下この号及び第五項において同じ。）であつた者がその被扶養者等であつた間に受けた療養について第一号に規定する合算額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額

六 基準日被保険者又は基準日被扶養者が計算期間に受けた居宅サービス等（介護保険法施行令（平成十年政令第四百十二号）第二十二條の二の第二項に規定する居宅サービス等をいう。次項において同じ。）に係る同条第二項第一号及び第二号に掲げる額の合算額（同項の規定により高額介護サービス費が支給される場合にあっては、当該支給額を控除した額とする。）
 七 基準日被保険者又は基準日被扶養者が計算期間に受けた介護予防サービス等（介護保険法施行令第二十二條の二の第二項に規定する介護予防サービス等をいう。次項において同じ。）に係る同条第二項第三号及び第四号に掲げる額の合算額（同令第二十九條の二の第二項の規定により高額介護予防サービス費が支給される場合にあっては、当該支給額を控除した額とする。）

2 前項各号に掲げる額のうち、七十歳に達する日の属する月の翌月以後に受けた療養又は居宅サービス等若しくは介護予防サービス等（以下この項及び第六項において「七十歳以上合算対象サービス」という。）に係る額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額（以下この項において「七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額」という。）が七十歳以上介護合算算定基準額に支給基準額を加えた額を超える場合は、七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額から七十歳以上介護合算算定基準額を控除した額に七十歳以上介護合算按分率（七十歳以上合算対象サービスに係る前項第一号に掲げる額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を、七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得た額を高額介護合算療養費として基準日被保険者に支給する。ただし、七十歳以上合算対象サービスに係る前項第一号から第五号までに掲げ

る額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額又は七十歳以上合算対象サービスに係る同項第六号及び第七号に掲げる額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

3 前二項の規定は、計算期間において当該被保険者の被保険者であつた者（基準日被扶養者に限る。）に対する高額介護合算療養費の支給について準用する。この場合において、第一項中「第一号に掲げる」とあるのは「第三号に掲げる」と、同項ただし書中「同号」とあるのは「第一号」と、前項中「前項第一号」とあるのは「前項第三号」と読み替へるものとする。

4 第一項及び第二項の規定は、計算期間において当該被保険者の被保険者であつた者（基準日において他の健康保険の被保険者又はその被扶養者である者に限る。）に対する高額介護合算療養費の支給について準用する。この場合において、第一項中「第一号に掲げる額」とあるのは「第四項に規定する者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（第一号に規定する継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた者がその被扶養者であつた間に受けた療養（同号に規定する継続給付に係る療養を含む。）に係る同号に規定する合算額」と、同項第一号中「基準日被保険者」とあるのは「他の健康保険の被保険者の被保険者（基準日において当該他の健康保険の被保険者である者に限る。以下この項及び次項において「基準日被保険者」という。）と、「保険者の」とあるのは「他の健康保険の被保険者（以下この項において「基準日保険者」という。）の」と、同項第二号中「他の」とあるのは「基準日保険者以外の」と、同項第三号中「基準日被扶養者」とあるのは「基準日被保険者の被扶養者（基準日において基準日保険者の被保険者の被扶養者である者に限る。以下この項において「基準日被扶養者」という。）と、「保険者の」とあるのは「基準日保険者の」と、同項第四号中「他の」とあるのは「基準日保険者以外の」と、第二項中「七十歳以上合算対象サービスに係る前項第一号に掲げる額」とあるのは「第四項に規定する者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（七十歳に

る額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額又は七十歳以上合算対象サービスに係る同項第六号及び第七号に掲げる額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

る額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額又は七十歳以上合算対象サービスに係る同項第六号及び第七号に掲げる額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

達する日の属する月の翌月以後に受けた療養に限り、継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた者がその被扶養者であつた間に受けた療養（七十歳に達する日の属する月の翌月以後に受けた療養に限り、継続給付に係る療養を含む。）に係る前項第一号に規定する合算額」と読み替へるものとする。

5

計算期間において当該被保険者の被保険者であつた者（基準日において組合員等（国民健康保険の世帯主等であつて被保険者又はその被扶養者である者及び後期高齢者医療の被保険者を除く。）である者又は被扶養者等である者に限る。）に対する高額介護合算療養費は、当該組合員等である者を基準日被保険者と、当該被扶養者等である者を基準日被扶養者とそれぞれみなして厚生労働省令で定めるところにより算定した第一号各号に掲げる額に相当する額（以下この項及び次項において「通算対象負担額」という。）を合算した額から七十歳以上介護合算支給総額（次項の七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額から同項の七十歳以上介護合算算定基準額を控除した額（当該額が支給基準額以下である場合又は当該七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額から介護合算算定基準額を控除した額につき同項ただし書に該当する場合には、零とする。）をいう。）を控除した額（以下この項において「介護合算一部負担金等世帯合算額」という。）が介護合算算定基準額に支給基準額を加えた額を超える場合に支給するものとし、その額は、介護合算一部負担金等世帯合算額から介護合算算定基準額を控除した額に介護合算按分率（この項に規定する者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた間に受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）に係る通算対象負担額から次項の規定により支給される高額介護合算療養費の額を控除した額を、介護合算一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得た額とする。ただし、第一号第一号から第五号までに係る通算対象負担額を合算した額又は同項第六号及び第七号に係る通算対象負担額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

6

通算対象負担額のうち、七十歳以上合算対象サービシに係る額に相当する額として厚生労働省令で定めるところにより算定した額（以下こ

の項において「七十歳以上通算対象負担額」という。）を合算した額（以下この項において「七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額」という。）が七十歳以上介護合算算定基準額に支給基準額を加えた額を超える場合は、七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額から七十歳以上介護合算算定基準額を控除した額に七十歳以上介護合算按分率（前項に規定する者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた間に受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）に係る七十歳以上通算対象負担額を、七十歳以上介護合算一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得た額を高く介護合算療養費として同項に規定する者に支給する。ただし、第一号第一号から第五号までに係る七十歳以上通算対象負担額を合算した額又は同項第六号及び第七号に係る七十歳以上通算対象負担額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

7

計算期間において当該被保険者の被保険者であつた者（基準日において後期高齢者医療の被保険者である者に限る。）に対する高額介護合算療養費は、当該後期高齢者医療の被保険者である者を基準日被保険者とみなして厚生労働省令で定めるところにより算定した第一号各号に掲げる額に相当する額（以下この項において「通算対象負担額」という。）を合算した額（以下この項において「介護合算一部負担金等世帯合算額」という。）が介護合算算定基準額に支給基準額を加えた額を超える場合に支給するものとし、その額は、介護合算一部負担金等世帯合算額から介護合算算定基準額を控除した額に介護合算按分率（この項に規定する者が計算期間における当該被保険者の被保険者であつた間に、当該者が受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）又はその被扶養者であつた間に受けた療養（継続給付に係る療養を含む。）に係る通算対象負担額から次項の規定により支給される高額介護合算療養費の額を、介護合算一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。）を乗じて得た額とする。ただし、第一号第一号から第五号までに係る通算対象負担額を合算した額又は同項第六号及び第七号に係る通算対象負担額を合算した額が零であるときは、この限りでない。

第四十三条の三 前条第一項（同条第三項及び第四項において準用する場合を除く。）の介護合

- 算算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。
 - 一 次号から第五号までに掲げる者以外の者 六十七万円
 - 二 基準日の属する月の標準報酬月額が八十三万円以上の被保険者 二百十二万円
 - 三 基準日の属する月の標準報酬月額が五十三万円以上八十三万円未満の被保険者 百四十一万円
 - 四 基準日の属する月の標準報酬月額が二十八万円未満の被保険者（次号に掲げる者を除く。） 六十万円
 - 五 市町村民税非課税者（基準日の属する年度の前年度（次条第一項の規定により前年八月一日から三月三十一日までのいずれかの日を基準日とみなした日）にあつては、当該基準日とみなした日の属する年度）分の地方税法の規定による市町村民税が課されない者（市町村の条例で定めるところにより当該市町村民税を免除された者を含むものとし、当該市町村民税の賦課期日において同法の施行地に住所を有しない者を除く。）をいう。次項第五号において同じ。）である被保険者（第二号及び第三号に掲げる者を除く。） 三十四万円
- 2 前条第二項（同条第三項及び第四項において準用する場合を除く。）の七十歳以上介護合算算定基準額は、次の各号に掲げる者の区分に応じ、当該各号に定める額とする。
 - 一 次号から第六号までに掲げる者以外の者 五十六万円
 - 二 基準日において療養の給付を受けることとした場合に法第七十四条第一項第三号の規定が適用される者（次号及び第四号において「第三号適用者」という。）であつて、基準日の属する月の標準報酬月額が八十三万円以上のもの 二百十二万円
 - 三 第三号適用者であつて、基準日の属する月の標準報酬月額が五十三万円以上八十三万円未満のもの 百四十一万円
 - 四 第三号適用者であつて、基準日の属する月の標準報酬月額が五十三万円未満のもの 六十七万円
 - 五 市町村民税非課税者である被保険者（前二号又は次号に掲げる者を除く。） 三十一万円
 - 六 被保険者及び基準日の属する月における厚生労働省令で定める日においてその被扶養者

- である者の全てが基準日の属する年度の前年度（次条第一項の規定により前年八月一日から三月三十一日までのいずれかの日を基準日とみなした日）にあつては、当該基準日とみなした日の属する年度）分の地方税法の規定による市町村民税に係る同法第三百三十三条第一項に規定する総所得金額及び山林所得金額に係る所得税法第二条第一項第二十二号に規定する各種所得の金額並びに他の所得と区分して計算される所得の金額がない被保険者（第二号から第四号までに掲げる者を除く。） 十九万円
- 3 第一項の規定は前条第三項において準用する同条第一項の介護合算算定基準額について、前項の規定は同条第三項において準用する同条第二項の七十歳以上介護合算算定基準額について、それぞれ準用する。この場合において、第一項中「前条第一項（同条第三項及び第四項において準用する場合を除く。）とあるのは、「前条第三項において準用する同条第一項」と、「次の各号に掲げる者」とあるのは「同条第三項に規定する者について基準日において当該者を扶養する次の各号に掲げる被保険者」と、前項中「前条第二項（同条第三項及び第四項において準用する場合を除く。）とあるのは「前条第三項において準用する同条第二項」と、「次の各号に掲げる者」とあるのは「同条第三項に規定する者について基準日において当該者を扶養する次の各号に掲げる被保険者」と読み替へるものとする。
- 4 第一項の規定は前条第四項において準用する同条第一項の介護合算算定基準額について、第二項の規定は同条第四項において準用する同条第二項の七十歳以上介護合算算定基準額について、それぞれ準用する。この場合において、第一項中「前条第一項（同条第三項及び第四項において準用する場合を除く。）とあるのは「前条第四項において準用する同条第一項」と、「次の各号に掲げる者」とあるのは「同条第四項に規定する者であつて、基準日において他の健康保険の被保険者の被保険者である者にあつては次の各号に掲げる当該者の区分に応じ、基準日において他の健康保険の被保険者の被保険者の被扶養者である者にあつては次の各号に掲げる当該被保険者」と、「当該各号」とあるのは「それぞれ当該各号」と、第二項中「前条第二項（同条第三項及び第四項において準用する場

に係る高額介護合算療養費の支給について準用する。

7 日雇特別被保険者が計算期間において法第三
条第二項ただし書の規定による承認を受け若し
くは法第二百二十六条第三項の規定により日雇特
例被保険者手帳を返納し、かつ、当該承認を受
けた日又は当該日雇特別被保険者手帳を返納し
た日以後の当該計算期間において医療保険加入
者とならない場合その他厚生労働省令で定める
場合における高額介護合算療養費の支給につい
ては、当該承認を受けた日の前日又は当該日雇
特別被保険者手帳を返納した日の前日（当該厚
生労働省令で定める場合にあつては、厚生労働
省令で定める日）を基準日とみなして、前二項
の規定及びこれらの規定において準用する規定
を適用する。

第六章 手数料

(手数料の額等)
第四十四条の二 法第五十条の十第一項の規定
により匿名診療等関連情報利用者(法第五十
条の三に規定する匿名診療等関連情報利用者
をいう。次条第二項及び第三項において同じ。)
が納付すべき手数料の額は、匿名診療等関連情
報(法第五十条の十第一項に規定する匿名診
療等関連情報をいう。次条第三項において同
じ。)の提供に要する時間一時間までごとに四
千二百五十円とする。

2 前項の手料は、厚生労働省令で定める書面
に収入印紙を貼って納付しなければならない。
ただし、法第五十条の十第一項の規定により
基金等(法第五十条の九に規定する基金等を
いう。次条第三項において同じ。)に対し手
料を納付する場合は、この限りでない。
(手数料の免除)

第四十四条の三 法第五十条の十第二項の政令
で定める者は、次のとおりとする。

- 一 都道府県その他の法第五十条の二第一項
第一号に掲げる者
- 二 法第五十条の二第二項第二号又は第三号
に掲げる者のうち、それぞれ同項第二号又は
第三号に定める業務(補助金等に係る予算の
執行の適正化に関する法律(昭和三十年法律
第七十九号)第二条第一項に規定する補助
金等、地方自治法(昭和二十二年法律第六十
七号)第二十三十二条の二(同法第二百八十
三条第一項の規定により適用する場合を含
む。)の規定により地方公共団体が支出する

補助金又は国立研究開発法人日本医療研究開
発機構法(平成二十六年法律第四十九号)第
十六条第三号に掲げる業務として国立研究開
発法人日本医療研究開発機構が交付する助成
金を充てて行うものに限る。)を行う者

三 法第五十条の二第二項第二号又は第三号
に掲げる者のうち、第一号に掲げる者から同
項第一号に定める業務の委託(二以上の段階
にわたる委託を含む。以下この号において同
じ。)を受けた者又は前号に掲げる者から同
号に規定する業務の委託を受けた者

四 前三号に掲げる者のみにより構成されてい
る団体

2 厚生労働大臣は、匿名診療等関連情報利用者
が前項各号に掲げる者のいずれかである場合に
は、法第五十条の十第一項の手料を免除す
る。

3 前項の規定による手数料の免除を受けようと
する匿名診療等関連情報利用者は、当該免除を
求める旨及びその理由を記載した書面を厚生労
働大臣(法第五十条の九の規定により厚生労
働大臣からの委託を受けて、基金等が法第五
十条の二第二項の規定による匿名診療等関連情
報の提供に係る事務の全部を行う場合にあって
は、基金等)に提出しなければならない。

第七章 費用の負担

第四十四条の四 政府は、次項の場合を除き、厚
生労働大臣が徴収した保険料その他の法の規定に
よる徴収金及び印紙をもつてする歳入金納付に
関する法律(昭和二十三年法律第四十二号)
の規定による納付金(以下この項及び次項にお
いて「保険料等」という。)が年金特別会計の
健康勘定(同項において「健康勘定」という。)
において収納されたときは、その都度遅滞な
く、協会に対し、当該収納された保険料等の額
から厚生労働大臣が行う健康保険事業の事務の
執行に要する費用に相当する額(法第五十一
条の規定による当該費用に係る国庫負担金の額
を除く。)として厚生労働省令で定めるところ
により算定した額を控除した額を法第五十五
条の二の規定による交付金(以下この条におい
て「保険料等交付金」という。)として交付す
る。

2 政府は、当該年度の健康勘定に前年度の決算
上の剰余金が繰り入れられたときは、遅滞な
く、協会に対し、当該繰り入れられた額(保険
料等に係るもの以外のものとして厚生労働大臣
が定めるものを除く。)を保険料等交付金とし
て交付する。

3 政府は、各月ごとに、協会に対し、当該各月
において交付した保険料等交付金の額の算定根
拠を明らかにするものとする。

4 前三項に定めるもののほか、保険料等交付金
の交付に関し必要な事項は、厚生労働省令で
定める。

(介護保険料額が徴収される場合)
第四十五条 法第五十六条第二項ただし書(法
附則第七条第三項において準用する場合を含
む。)の政令で定める場合は、介護保険第二号
被保険者(介護保険法第九条第二号に規定する
被保険者をいう。以下同じ。)となつた月にお
いて介護保険第二号被保険者に該当しなくな
つた場合とする。

(都道府県単位保険料率の算定方法)
第四十五条の二 協会は、厚生労働省令で定める
ところにより、一の事業年度の翌事業年度にお
ける、第一号に掲げる額を予定保険料納付率
(一の事業年度の三月分から当該一の事業年度
の翌事業年度の二月分までの保険料(任意継続
被保険者に係る保険料にあつては、当該翌事業
年度の四月分から三月分までの保険料)として
徴収すべき額の見込額に占める当該翌事業年度
において納付が見込まれる保険料の額の総額の
割合として厚生労働省令で定めるところにより
算定される率をいう。次条において同じ。)で
除して得た額を第二号に掲げる額で除すること
により、当該一の事業年度の三月から用いる都
道府県単位保険料率(法第六十条第二項に規
定する都道府県単位保険料率をいう。次条及び
第四十五条の四第四項第一号において同じ。)
を算定するものとする。

一 次のイからハまでに掲げる額を合算した額
から二に掲げる額を控除した額

- イ 法第六十条第三項第一号に掲げる額か
ら当該支部被保険者(同条第一項に規定す
る支部被保険者をいう。以下同じ。)に係
る同号に規定する療養の給付等(第四十五
条の四第四項第一号及び第二号において
「療養の給付等」という。)に要する費用の
うち法の規定により支払うべき一部負担金
に相当する額の見込額を控除した額
- ロ 法第六十条第三項第二号に掲げる額か
ら当該支部被保険者に係る同号に規定する

保険給付に要する費用のうち法の規定によ
り支払うべき一部負担金に相当する額の見
込額を控除した額と一の事業年度の前々事
業年度の三月から当該一の事業年度の前事
業年度の二月までの各月の当該支部被保険
者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬
額(標準報酬月額及び標準賞与額の合計額
をいう。以下この条及び次条において同
じ。)の総額及び当該一の事業年度の前事
業年度の四月から三月までの各月の当該支
部被保険者(任意継続被保険者に係る)の
総報酬額の合算額に千分の〇・一
を乗じて得た額とを合算して得た額

ハ 法第六十条第三項第三号に掲げる額

- 一 一の事業年度において取り崩すことが見
込まれる準備金の額その他健康保険事業に
要する費用のための収入の見込額のうち当
該支部被保険者を単位とする健康保険の当
該一の事業年度の財政においてその収入と
みなすべき額として協会が定める額並びに
高齢者の医療の確保に関する法律第十八条
第一項に規定する特定健康診査及び同項に
規定する特定保健指導の実施状況その他の
当該支部被保険者及びその被扶養者の健康
の保持増進並びに医療に要する費用の適正
化に係る当該支部(法第七条の四第一項に
規定する支部をいう。)の取組の状況を勘
算して厚生労働省令で定めるところにより
算定した報奨金の額

二 一の事業年度の三月から当該一の事業年度
の翌事業年度の二月までの各月の当該支部被
保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報
酬額の総額及び当該一の事業年度の翌事業年
度の四月から三月までの各月の当該支部被保
険者(任意継続被保険者に限る。)の総報酬
額の総額の合算額の見込額

(三月以外の月から用いる都道府県単位保険料
率の算定方法)

第四十五条の三 協会は、前条の規定にかかわら
ず、その変更しようとする都道府県単位保険料
率を三月以外の月から用いようとするときは、
厚生労働省令で定めるところにより、第一号に
掲げる額から第二号に掲げる額を控除した額を
予定保険料納付率で除して得た額を第三号に掲
げる額で除することにより、当該都道府県単位
保険料率を算定するものとする。

一 当該変更後の都道府県単位保険料率を用い
る最初の月(次号及び第三号において「適用

月」という。)の属する事業年度における前条第一号に掲げる額

二 次のイからハまでに掲げる適用月の区分に応じ、それぞれイからハまでに定める額

イ ロ又はハに掲げる月以外の月 適用月の属する事業年度の前事業年度の三月から当該適用月の前月までの各月の当該支店被保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬額の総額及び当該適用月の属する事業年度の四月から当該適用月の前月までの各月の当該支店被保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬額の総額(任意継続被保険者の合算額に限る。)

ロ 当該支店被保険者の合算額の見込額に当該変更前の都道府県単位保険料率を乗じて得た額に当該適用月の属する事業年度における予定保険料納付率を乗じて得た額

四 四月 当該四月の前月の当該支店被保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬額の総額の見込額に当該変更前の都道府県単位保険料率を乗じて得た額に当該四月の属する事業年度における予定保険料納付率を乗じて得た額

ハ 五月 当該五月の前々月及び前月の当該支店被保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬額の総額並びに当該五月の前月の当該支店被保険者(任意継続被保険者に限る。)の総報酬額の総額の合算額の見込額に当該変更前の都道府県単位保険料率を乗じて得た額に当該五月の属する事業年度における予定保険料納付率を乗じて得た額

三 適用月から当該適用月の属する事業年度の二月までの各月(適用月が二月の場合)については、当該二月)の当該支店被保険者(任意継続被保険者を除く。)の総報酬額の総額及び当該適用月から当該適用月の属する事業年度の三月までの各月の当該支店被保険者(任意継続被保険者に限る。)の総報酬額の総額の合算額の見込額

(支店被保険者を単位とする健康保険の財政の調整)

第四十五条の四 法第六十条第四項の規定により行う支店被保険者を単位とする健康保険の財政の調整は、年齢調整及び財政力調整とする。

2 前項の年齢調整は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定めるところにより行うものとする。

一 支店年齢調整標準給付費額が支店平均給付費額以上である場合 当該支店年齢調整標準給

給付費額から当該支店平均給付費額を控除した額を控除すること。

二 支店年齢調整標準給付費額が支店平均給付費額未満である場合 当該支店平均給付費額から当該支店年齢調整標準給付費額を控除した額を加算すること。

3 第一項の財政力調整は、次の各号に掲げる場合の区分に応じ、当該各号に定めるところにより行うものとする。

一 支店総報酬按分給付費額が支店平均給付費額以上である場合 当該支店総報酬按分給付費額から当該支店平均給付費額を控除した額を加算すること。

二 支店総報酬按分給付費額が支店平均給付費額未満である場合 当該支店平均給付費額から当該支店総報酬按分給付費額を控除した額を控除すること。

4 前二項において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。

一 支店年齢調整標準給付費額 厚生労働省令で定めるところにより、年齢階級ごとに、当該年齢階級に係る年齢階級別平均一人当たり給付額(厚生労働省令で定めるところにより、療養の給付等のうち協会が管掌する健康保険の被保険者及びその被扶養者であつて当該年齢階級に属する者)に係るものについて当該一の事業年度の翌事業年度(第四十五条の二に規定する当該一の事業年度の翌事業年度をいい、前条の規定に基づき都道府県単位保険料率を算定する場合にあつては、同条に規定する当該適用月の属する事業年度をいう。以下この項において同じ。)に要する費用の見込額から当該見込額のうち法の規定により支払うべき一部負担金に相当する額及び法第五十三條の規定による国庫補助の額の合算額の見込額を控除した額を、当該一の事業年度の翌事業年度において協会が管掌する健康保険の被保険者及びその被扶養者であつて当該年齢階級に属する者の合計数の見込数で除して得た額をいう。

二 支店平均給付費額 厚生労働省令で定めるところにより、平均一人当たり給付額(厚生労働省令で定めるところにより、療養の給付

等のうち協会が管掌する健康保険の被保険者及びその被扶養者に係るもの)について当該一の事業年度の翌事業年度に要する費用の見込額から当該見込額のうち法の規定により支払うべき一部負担金に相当する額及び法第五十三條の規定による国庫補助の額の合算額の見込額を控除した額(次号において「総給付費見込額」という。)を、当該一の事業年度の翌事業年度における協会が管掌する健康保険の被保険者及びその被扶養者の合計数の見込数で除して得た額をいう。

三 支店総報酬按分給付費額 厚生労働省令で定めるところにより、総給付費見込額に当該一の事業年度の翌事業年度における法第六十条第三項第二号に規定する総報酬按分率の見込値を乗じて得た額をいう。

第四十六条 協会は、毎事業年度末において、当該事業年度及びその直前の二事業年度内において行った保険給付に要した費用の額(前期高齢者納付金等、後期高齢者支学金等及び日雇拋出金並びに介護納付金の納付に要した費用の額(前期高齢者交付金がある場合には、これを控除した額)を含み、法第五十三條及び第五十四條の規定による国庫補助の額を除く。)の一事業年度当たりの平均額の十二分の一に相当する額に達するまでは、当該事業年度の剰余金の額を準備金として積み立てなければならない。

2 健康保険組合は、毎事業年度末において、当該事業年度及びその直前の二事業年度内において行った保険給付に要した費用の額(被保険者又はその被扶養者が法第六十三條第三項第三号に掲げる病院若しくは診療所又は薬局から受けた療養に係る保険給付に要した費用の額を除く。)の一事業年度当たりの平均額の十二分の三に相当する額と当該事業年度及びその直前の二事業年度内において行った前期高齢者納付金等、後期高齢者支学金等及び日雇拋出金並びに介護納付金の納付に要した費用の額(前期高齢者交付金がある場合には、これを控除した額)の一事業年度当たりの平均額の十二分の一に相当する額とを合算した額に達するまでは、当該事業年度の剰余金の額を準備金として積み立てなければならない。

(二以上の事業所に使用される場合の保険料)

第四十七条 法第六十一条第四項の規定により被保険者(日雇特別被保険者を除く。以下同じ。)が同時に二以上の事業所又は事務所(以下単に「事業所」という。)に使用される場合における各事業主の負担すべき標準報酬月額に係る保険料の額は、第一号に掲げる額に第二号に掲げる数を乗じて得た額とする。

一 当該被保険者の保険料の半額(法第六十二条の規定が適用された場合にあつては、保険料の額に事業主の負担すべき割合を乗じて得た額)

二 各事業所について法第四十一条第一項、第四十二条第一項若しくは第四十三条第一項又は第四十四条第一項の規定により算定した額を当該被保険者の報酬月額で除して得た額

法第六十一条第四項の規定により被保険者が同時に二以上の事業所に使用される場合における各事業主の負担すべき標準賞与額に係る保険料の額は、前項第一号に掲げる額に各事業所についてその月に各事業主が支払った賞与額をその月に当該被保険者が受けた賞与額で除して得た数を乗じて得た額とする。

法第六十一条第四項の被保険者が同時に二以上の事業所に使用される場合における各事業主が納付すべき保険料は、前二項の規定により各事業主が負担すべき保険料及びこれに應ずる当該被保険者が負担すべき保険料とする。

(保険料の前納期間)

第四十八条 法第六十五条第一項の規定による保険料の前納は、四月から九月まで若しくは十月から翌年三月までの六月間又は四月から翌年三月までの十二月間を単位として行うものとする。ただし、当該六月又は十二月の間において、任意継続被保険者の資格を取得した者又はその資格を喪失することが明らかである者については、当該六月間又は十二月間のうち、その資格を取得した日の属する月の翌月以降の期間又はその資格を喪失する日の属する月の前月までの期間の保険料について前納を行うことができる。

(前納の際の控除額)

第四十九条 法第六十五条第二項の政令で定める額は、前納に係る期間の各月の保険料の合計額から、その期間の各月の保険料の額を年四分の利率による複利現価法によって前納に係る期間の最初の月から当該各月までのそれぞれの期

間に応じて割り引いた額の合計額（この額に一円未満の端数がある場合において、その端数金額が五十銭未満であるときは、これを切り捨て、その端数金額が五十銭以上であるときは、これを一円として計算する。）を控除した額とする。

（前納保険料の充当）

第五十条 法第六十五条第一項の規定により保険料が前納された後、前納に係る期間の経過前において任意継続被保険者に係る保険料の額の引上げが行われることとなった場合においては、前納された保険料のうち当該保険料の額の引上げが行われることとなった後の期間に係るものは、当該期間の各月につき納付すべきこととなる保険料に、先に到来する月の分から順次充当するものとする。

（前納保険料の還付）

第五十一条 法第六十五条第一項の規定により保険料を前納した後、前納に係る期間の経過前において任意継続被保険者がその資格を喪失した場合においては、その者（法第三十八条第二号に該当するに至った場合においては、その者の相続人）の請求に基づき、前納した保険料のうち未経過期間に係るものを還付する。

2 前項に規定する未経過期間に係る還付額は、任意継続被保険者の資格を喪失した時において当該未経過期間につき保険料を前納するものとした場合におけるその前納すべき額に相当する額とする。

（準用）

第五十二条 第四十八条から前条までの規定は、法附則第三条第一項に規定する特例退職被保険者の保険料の前納について準用する。

（厚生労働省令への委任）

第五十三条 第四十八条から前条までに定めるもののほか、保険料の前納その他保険料の前納に関して必要な事項は、厚生労働省令で定める。

（日雇特例被保険者の保険料額）

第五十四条 法第六十八條第一項の規定により日雇特例被保険者に関する保険料額を算定する場合並びに法第六十九條第一項の規定により日雇特例被保険者の負担すべき額及び日雇特例被保険者を使用する事業主の負担すべき額を算定する場合において、法第六十八條第一項第一号イ及びロに掲げる額に十円未満の端数があるときは、その端数を切り捨てるものとする。

2 厚生労働大臣は、日雇特例被保険者に関する保険料額並びに日雇特例被保険者の負担すべき額及び日雇特例被保険者を使用する事業主の負担すべき額を告示するものとする。

（日雇拠出金の納期及び納付の額）

第五十五条 日雇拠出金の納期は、九月三十日及び三月三十一日とする。

2 各納期に納付すべき日雇拠出金の額は、法第七十四条の規定による当該年度の日雇拠出金の額の二分の一に相当する金額とする。

3 前項の規定にかかわらず、当該年度の日雇拠出金の額に二千円未満の端数があるときは、九月三十日の納期に納付すべき額は当該年度の日雇拠出金の額に当該端数の額を加算した額の二分の一に相当する金額とし、三月三十一日の納期に納付すべき額は当該年度の日雇拠出金の額から当該端数の額を控除した額の二分の一に相当する金額とする。

（日雇拠出金の納付の猶予）

第五十六条 厚生労働大臣は、やむを得ない事情により、日雇特例被保険者を使用する事業主の設立する健康保険組合又は法第七十九条に規定する国民健康保険の保険者（以下この項及び次項において「日雇関係組合」という。）が日雇拠出金を納付することが著しく困難であると認められるときは、厚生労働省令で定めるところにより、当該日雇関係組合の申請に基づき、その納期から一年以内の期間を限り、その一部の納付を猶予することができる。

（設立の費用の負担）

第五十七条 健康保険組合連合会（以下「連合会」という。）の設立に要する費用は、連合会が負担するものとする。ただし、連合会が成立しなかつた場合においては、その費用は、その設立の認可の申請をした健康保険組合の負担とする。

（役員）

第五十八条 役員（役員）の任期は、二年とする。ただし、補欠の役員の場合は、前任者の残任期間とする。

（残余財産の帰属）

第五十九条 解散した連合会の財産は、規約で指定した者に帰属する。

2 規約で権利の帰属すべき者を指定せず、又はその者を指定する方法を定めなかつたときは、会長は、厚生労働大臣の許可を得て、連合会の目的に類似する目的のために、その財産を処分することができる。ただし、総会の決議を経なければならぬ。

3 前二項の規定により処分されない財産は、国庫に帰属する。

（清算中の連合会の能力）

第五十九条の二 解散した連合会は、清算の目的の範囲内において、その清算の結了に至るまではなお存続するものとみなす。

（清算人）

第五十九条の三 連合会が解散したときは、破産手続開始の決定による解散の場合を除き、会長、副会長及び理事がその清算人となる。ただし、規約に別段の定めがあるとき、又は総会において会長、副会長及び理事以外の者を選任したときは、この限りでない。

（裁判所による清算人の選任）

第五十九条の四 前条の規定により清算人となる者がなく、又は清算人が欠けたため損害を生ずるおそれがあるときは、裁判所は、利害関係人若しくは検察官の請求により又は職権で、清算人を選任することができる。

（清算人の解任）

第五十九条の五 重要な事由があるときは、裁判所は、利害関係人若しくは検察官の請求により又は職権で、清算人を解任することができる。

（清算人及び解散の届出）

第五十九条の六 清算人は、破産手続開始の決定及び法第八十八条において読み替えて準用する法第二十九条第二項の規定による解散の命令の場合を除き、その氏名及び住所並びに解散の原因及び年月日を厚生労働大臣に届け出なければならない。

（清算中の職務）

2 清算中に就職した清算人は、その氏名及び住所を厚生労働大臣に届け出なければならない。

3 前項の規定は、法第八十八条において読み替えて準用する法第二十九条第二項の規定による解散の命令の際に就職した清算人について準用する。

（清算人の職務及び権限）

第五十九条の七 清算人の職務は、次のとおりとする。

一 現務の結了

二 債権の取立て及び債務の弁済

三 残余財産の引渡し

2 清算人は、前項各号に掲げる職務を行うために必要な一切の行為をすることができる。

（債権の申出の催告等）

第五十九条の八 清算人は、その就職の日から二月以内に、少なくとも三回の催告をもって、債権者に対し、一定の期間内にその債権の申出をすべき旨の催告をしなければならない。この場合において、その期間は、二月を下ることができない。

2 前項の公告には、債権者がその期間内に申出をしないときは清算から除外されるべき旨を付記しなければならない。ただし、清算人は、知れている債権者を除外することができる。

3 清算人は、知れている債権者には、各別にその申出の催告をしなければならない。

4 第一項の公告は、官報に掲載してする。

（期間経過後の債権の申出）

第五十九条の九 前条第一項の期間の経過後に申出をした債権者は、連合会の債務が完済された後まだ権利の帰属すべき者に引き渡されていない財産に対してのみ、請求をすることができる。

（裁判所による監督）

第五十九条の十 連合会の解散及び清算は、裁判所の監督に属する。

2 裁判所は、職権で、いつでも前項の監督に必要な検査をすることができる。

3 連合会の解散及び清算を監督する裁判所は、厚生労働大臣に対し、意見を求め、又は調査を囑託することができる。

4 厚生労働大臣は、前項に規定する裁判所に対し、意見を述べることができる。

（清算結了の届出）

第五十九条の十一 清算が結了したときは、清算人は、その旨を厚生労働大臣に届け出なければならない。

（解散及び清算の監督等に関する事件の管轄）

第五十九条の十二 連合会の解散及び清算の監督並びに清算人に関する事件は、その主たる事務所所在地を管轄する地方裁判所の管轄に属する。

（不服申立ての制限）

第五十九条の十三 清算人の選任の裁判に対しては、不服を申し立てることができない。

（裁判所の選任する清算人の報酬）
第五十九条の十四 裁判所は、第五十九条の四の規定により清算人を選任した場合には、連合会が当該清算人に対して支払う報酬の額を定めることができる。この場合においては、裁判所は、当該清算人及び監事の陳述を聴かなければならない。

（検査役の選任）
第五十九条の十五 裁判所は、連合会の解散及び清算の監督に必要な調査をさせるため、検査役を選任することができる。

2 前二条の規定は、前項の規定により裁判所が検査役を選任した場合について準用する。この場合において、前条中「清算人及び監事」とあるのは、「連合会及び検査役」と読み替えるものとする。
（準用）

第六十条 第二条（第一項第三号を除く）、第三条から第五条まで、第七条から第十三条まで、第十四条第二項、第十五条から第十九条まで、第二十二号から第二十四号まで、第二十八条（第三号を除く）及び第三十三号の規定は、連合会について準用する。この場合において、これらの規定中「理事長」とあるのは、「会長」と、「組合会」とあるのは「総会」と、「第三条第二項、第四条及び第五条中「適用事業所の事業主」とあるのは「健康保険組合の理事長」と、第九条中「第十一条」とあるのは「第六十条において準用する第十一条」と、第十条第三項中「法」とあるのは「法第八十八条において準用する法」と、第十条第四項及び第十二条第一項中「第八条」とあるのは「第六十条において準用する第八条」と読み替えるものとする。

第九章 雑則

（市町村が処理する事務等）

第六十一条 法第二百三条第一項の規定により、厚生労働大臣が指定する地域に居住する日雇特別被保険者（日雇特別被保険者であった者を含む。以下同じ。）に係る次に掲げる事務は、当該地域をその区域に含む市町村（特別区を含むものとし、地方自治法第二百五十二条の十九第一項の指定都市にあつては、区又は総合区とする。）の長が行うものとする。

- 一 日雇特別被保険者手帳の交付及び收受その他日雇特別被保険者手帳に関する事務
- 二 介護保険第二号被保険者である日雇特別被保険者及びそれ以外の日雇特別被保険者の把握に関する事務

2 法第二百三条第二項の規定により、協会は、前項に規定する地域をその区域に含む市町村（特別区を含む。次項において同じ。）に対し、当該地域に居住する日雇特別被保険者に係る次に掲げる事務を委託するものとする。

- 一 受給資格者票の発行及び受給資格者票への確認の表示その他受給資格者票に関する事務
- 二 特別療養費受給票の交付その他特別療養費受給票に関する事務
- 三 保険給付（埋葬料の支給を除く。）を行うために必要な保険料の納付状況の確認に関する事務及び被扶養者に係る保険給付に関する事務

3 第一項の場合又は前項の規定により委託された事務を市町村が行う場合においては、法の規定中これらの項に規定する事務に係る厚生労働大臣又は協会に関する規定は、それぞれ市町村長（特別区の区長を含むものとし、地方自治法第二百五十二条の十九第一項の指定都市にあつては、区長又は総合区長とする。以下この項において同じ。）又は市町村に適用する規定として市町村長又は市町村に適用があるものとする。（事務の区分）

第六十二条 前条第一項の規定により市町村（特別区を含む。）が処理することとされている事務は、地方自治法第二条第九項第一号に規定する第一号法定受託事務とする。
（法第二百四条の二第二項の政令で定める事情）
第六十三条 法第二百四条の二第二項の政令で定める事情は、次の各号のいずれにも該当するものであることとする。

- 一 納付義務者が厚生労働省令で定める月数分以上の保険料を滞納していること
- 二 納付義務者が法第二百四条の二第一項に規定する滞納処分等その他の処分（以下「滞納処分等」という。）の執行を免れる目的でその財産について隠ぺいしているおそれがあること
- 三 納付義務者が滞納している保険料等（法第二百四条の二第一項に規定する保険料等）をいう。次号、第六十四条の四、第六十四条の五、第六十四条の七、第六十四条の八第一項及び第六十四条の九において同じ。）の額（納付義務者が、厚生年金保険法の規定による保険料、子ども・子育て支援法（平成二十四年法律第六十五号）の規定による拠出金、厚生年金保険の保険給付及び保険料の納付の特例等に関する法律（平成十九年法律第三百一十一号）の規定による特例納付保険料その他これらの法律の規定による徴収金を滞納しているときは、当該滞納している保険料、拠出金、特例納付保険料又はこれらの法律の規定による徴収金の合計額を加算した額）が厚生労働省令で定める金額以上であること
- 四 滞納処分等その他の処分を受けたにもかかわらず、納付義務者が滞納している保険料等の納付について誠実な意思を有すると認められないこと

（財務大臣への権限の委任）
第六十四条 厚生労働大臣は、法第二百四条の二第一項の規定により滞納処分等その他の処分の権限を委任する場合には、次に掲げるものを除き、その全部を財務大臣に委任する。

- 一 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税徴収法（昭和三十四年法律第四百七十七号）第三百三十八条の規定による告知
- 二 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税徴収法第五百三十三条第一項の規定による滞納処分の執行の停止
- 三 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税通則法（昭和三十七年法律第六十六号）第十一条の規定による延長
- 四 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税通則法第三十六条第一項の規定による告知
- 五 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税通則法第五十五条第一項の規定による受託
- 六 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税通則法第六十三条の規定による免除
- 七 法第八十三条の規定によりその例によるものとされる国税通則法第二百三十三条第一項の規定による交付
- 八 前各号に掲げるもののほか、厚生労働省令で定める権限

項の規定により一の適用事業所となつた二以上の事業所又は事務所のうちから厚生労働大臣が指定する事業所又は事務所の所在地」と読み替えるものとする。
（国税局長又は税務署長への権限の委任）
第六十四条の三 国税庁長官は、法第二百四条の二第二項において準用する厚生年金保険法第百条の五第五項の規定により委任された権限の全部を、納付義務者の事業所の所在地（法第三十四条第一項の適用事業所にあつては、同項の規定により一の適用事業所となつた二以上の事業所のうちから厚生労働大臣が指定する事業所の所在地。次項において同じ。）を管轄する国税局長に委任する。

2 国税局長は、必要があると認めるときは、法第二百四条の二第二項において準用する厚生年金保険法第百条の五第六項の規定により委任された権限の全部を、納付義務者の事業所の所在地を管轄する税務署長に委任する。
（機構が収納を行う場合）
第六十四条の四 法第二百四条の六第一項の政令で定める場合は、次に掲げる場合とする。

- 一 法第八十条第二項の規定による督促を受けた納付義務者が保険料等の納付を日本年金機構法（平成十九年法律第九十九号）第二十九条に規定する年金事務所（次号及び次条第二項において「年金事務所」という。）において行うことを希望する旨の申出があつた場合
- 二 法第七十二条各号のいずれかに該当したことに伴い納期を繰り上げて保険料納入の告知を受けた納付義務者が保険料の納付を年金事務所において行うことを希望する旨の申出があつた場合
- 三 法第二百四条の六第二項において準用する厚生年金保険法第百条の十一第二項の規定により任命された法第二百四条の六第一項の収納を行う日本年金機構（以下「機構」という。）の職員（第五号及び第六十四条の九において「収納職員」という。）であつて併せて法第二百四条の三第一項の徴収職員として同条第二項において準用する厚生年金保険法第百条の六第二項の規定により任命された者（以下この号及び次号において「職員」という。）が、保険料等を徴収するため、前二号に規定する納付義務者を訪問した際に、当該納付義務者が当該職員による保険料等の収納を希望した場合

四 職員が、保険料等を徴収するため法第二百四十四条第一項第十五号に掲げる国税滞納処分の例による処分により金銭を取得した場合

五 前各号に掲げる場合のほか、保険料等の収納職員による収納が納付義務者の利便に資する場合その他の保険料等の収納職員による収納が適切かつ効果的な場合として厚生労働省令で定める場合

(公示)

第六十四條の五 厚生労働大臣は、法第二百四十四条の六第一項の規定により機構に保険料等の収納を行わせるに当たり、その旨を公示しなければならない。

2 機構は、前項の公示があつたときは、遅滞なく、年金事務所の名称及び所在地その他の保険料等の収納に關し必要な事項として厚生労働省令で定めるものを公表しなければならない。これを変更したときも、同様とする。

(機構が行う収納に關する厚生年金保険法の規定の読替え)

第六十四條の六 法第二百四十四条の六第二項の規定による厚生年金保険法の準用についての技術的読替えは、次の表のとおりとする。

厚生年金保険法読み替読み替える字句	法の規定中読えられ読み替える規定する字句
第百條の十一前項	健康保険法第二百四條の六第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)

第百條の十一前項	健康保険法第二百四條の六第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)
第百條の十一前項	健康保険法第二百四條の六第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)
第百條の十一前項	健康保険法第二百四條の六第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)
第百條の十一前項	健康保険法第二百四條の六第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(以下「機構」といふ。)

第六十四條の七 機構において国の毎会計年度所属の保険料等を収納するのは、翌年度の四月三十日限りとする。

(機構による収納手続)

第六十四條の八 機構は、保険料等につき、法第二百四十四条の六第一項の規定による収納を行ったときは、当該保険料等の納付をした者に対し、厚生労働省令で定めるところにより、領収証書を交付しなければならない。この場合において、機構は、厚生労働省令で定めるところにより、遅滞なく、当該収納を行った旨を年金特別会計の歳入徴収官に報告しなければならない。

2 厚生労働大臣は、前項に規定する厚生労働省令を定めるときは、あらかじめ、財務大臣に協議しなければならない。

(帳簿の備付け)

第六十四條の九 機構は、収納職員による保険料等の収納及び当該収納をした保険料等の日本銀行への送付に關する帳簿を備え、当該保険料等の収納及び送付に關する事項を記録しなければならない。

(厚生労働省令への委任)

第六十四條の十 第六十四條の四から前条までに定めるもののほか、法第二百四條の六の規定により機構が行う収納に關する必要な事項は、厚生労働省令で定める。

2 厚生労働大臣は、前項に規定する厚生労働省令を定めるときは、あらかじめ、財務大臣に協議しなければならない。

(機構への事務の委託に關する厚生年金保険法の規定の読替え)

第六十四條の十一 法第二百五條の二第二項の規定による厚生年金保険法の準用についての技術的読替えは、次の表のとおりとする。

厚生年金保険法読み替読み替える字句	法の規定中読えられ読み替える規定する字句
第百條の十前項	健康保険法第二百五條の二第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(次項において「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(次項において「機構」といふ。)
第百條の十前項	健康保険法第二百五條の二第二項
第一項	第一項
行つて行つて日本年金機構(次項において「機構」といふ。)	行つて行つて日本年金機構(次項において「機構」といふ。)

第六十五條 法附則第二条第一項の規定により連合会が行う交付金の交付の事業は、次に掲げる基準に適合するものでなければならない。

一 交付金の交付の対象となる健康保険組合は、次のいずれかに該当するものであること。

イ その所要保険料率(当該年度において各健康保険組合が行つた医療に關する給付(法第五十三條に規定するその他の給付を除く。以下「医療給付」といふ。))並びに前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拋出金の納付に要した費用の額(前期高齢者交付金がある場合)は、これを控除した額の見込額を当該年度における当該各健康保険組合の組合員である被保険者の標準報酬月額額の総額及び標準賞与額の総額の合算額の見込額で除して得た率をいう。以下同じ。)が連合会の会員である全健康保険組合の平均の所要保険料率以上である健康保険組合であつて、医療給付、保健事業及び福祉事業の実施並びに前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拋出金の納付に係る財政の負担を軽減することが必要であると認められるもの。

ロ イに掲げる健康保険組合以外の健康保険組合であつて、高額な医療給付の発生、報酬の水準の低下その他医療給付、保健事業及び福祉事業の実施並びに前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拋出金の納付に係る健康保険組合の財政状況に相対的な影響を及ぼす要因に照らし、その影響を緩和することが必要であると認められるもの。

二 交付金の交付事業の規模及び交付方法は、健康保険組合が行う事業について、健康保険組合の自主的な運営を妨げず、かつ、健康保険組合の事業努力を失わせないよう配慮されたものであること。

2 前項の基準の適用に關し必要な事項、交付金の額の算定に關し必要な事項その他交付金の交付に關して必要な事項は、厚生労働省令で定める。

3 連合会は、前項の厚生労働省令で定めるところに従い、交付金の交付に關する細目を定めなければならない。

(拋出金)

第六十六條 法附則第二条第二項の規定により健康保険組合が連合会に対して拋出すべき拋出金の額は、各年度につき当該健康保険組合が同条第三項の規定により徴収する調整保険料の総額とする。

2 前項に定めるもののほか、拋出金の納付方法その他拋出金の提出に關して必要な事項は、連合会が定める。

(調整保険料率)

第六十七條 法附則第四条第四項の調整保険料率は、基本調整保険料率に修正率を乗じて得た率とする。

2 前項の基本調整保険料率は、各年の三月から翌年の二月までの期間について、連合会が当該三月の属する年度の翌年度において交付する交付金の総額の見込額を当該翌年度における連合会の会員である全健康保険組合の組合員である被保険者の標準報酬月額額の総額及び標準賞与額の総額の合算額の見込額で除して得た率として厚生労働大臣が定める率とする。

3 第一項の修正率は、各健康保険組合につき、各年の三月から翌年の二月までの期間について、当該三月の属する年度において当該健康保険組合が行う医療給付並びに前期高齢者納付金等、後期高齢者支援金等及び日雇拋出金の納付に要する費用の見込額(前期高齢者交付金がある場合には、これを控除した額)を当該年度における当該健康保険組合の組合員である被保険者の標準報酬月額額の総額及び標準賞与額の総額の合算額の見込額で除して得た率(以下この項において「見込所要保険料率」といふ。))の連合会の会員である全健康保険組合の平均の見込所要保険料率に対する比率を基準として、連合会が定める。ただし、厚生労働大臣の定める率を超えてはならない。

(交付金の交付に關する細目等)

第六十八條 連合会は、第六十五條第三項若しくは第六十六條第二項の規定により交付金の交付に關する細目若しくは拋出金の提出に關して必要な事項を定め、若しくはこれらを変更しようとするとき、又は前条第三項の規定により修正率を定めようとするときは、厚生労働大臣の承認を受けなければならない。

(政令で定める法人)

第六十九條 法附則第四条第一項の政令で定めるものは、次のとおりとする。

一 健康保険組合が組織されている事業所以外の事業所の事業主及び当該事業所に使用される被保険者により組織された法人であつて、法附則第四条第一項に規定する給付の事業(次条において「給付事業」といふ。)を行うことを目的とするもの。

第六十六條 法附則第二条第二項の規定により健康保険組合が連合会に対して拋出すべき拋出金の額は、各年度につき当該健康保険組合が同条第三項の規定により徴収する調整保険料の総額とする。

二 前号に掲げるもののほか、同号に規定する事業主を構成員とする法人
 (承認法人等の要件等)
第七十条 法附則第四条第一項の政令で定める要件は、次のとおりとする。

一 前条第一号に掲げる法人にあつては法附則第四条第一項に規定する給付以外の給付の事業を、前条第二号に掲げる法人にあつては法附則第四条第一項に規定する給付に類する給付の事業を行わないこと。

二 当該事業所に使用される被保険者の大多数が給付事業に加入するものであること。

三 給付事業に要する費用は法附則第四条第三項の規定による掛金によつて充てられ、かつ、当該掛金は給付事業に要する費用以外の費用に充てられないものであること。

四 給付事業に係る経理は、他の事業に係る経理と区分して行うものであること。

五 その定款において、給付事業を廃止した場合に給付事業に係る残余の資産が健康保険に關する事業を行う法人に帰属する旨の定めがあること。

六 前各号に掲げるもののほか、給付事業が適正かつ確実に実施されるため必要なものとして厚生労働省令で定める要件を備えていること。

2 厚生労働大臣は、法附則第四条第一項の承認法人等が前項各号に掲げる要件のいずれかに該当しなくなつたときは、同条第一項の承認を取り消すものとする。
 (特定被保険者に関する介護保険料率の算定の特例)

第七十一条 法附則第七条第一項の規定により特定被保険者(同項に規定する特定被保険者をいう。以下同じ)に関する保険料額を一般保険料額と介護保険料額との合算額とした健康保険組合に対する法第六十条第十六項の規定の適用については、同項中「介護保険第二号被保険者である被保険者」とあるのは、「介護保険第二号被保険者である被保険者及び附則第七条第一項の規定によりその保険料額を一般保険料額と介護保険料額との合算額とされた同項に規定する特定被保険者」とする。

(承認健康保険組合の要件)
第七十二条 法附則第八条第一項の政令で定める要件は、介護保険第二号被保険者である被保険者(特定被保険者を含む)に関する保険料額

を一般保険料額と特別介護保険料額の合算額とするものとする。当該健康保険組合の組合会において組合会議員の定数の三分の二以上の多数により議決していることとする。
 (特別介護保険料額の算定の基準)
第七十三条 法附則第八条第二項の政令で定める特別介護保険料額の算定の基準は、次のとおりとする。

一 各介護保険第二号被保険者である被保険者又は特定被保険者(以下この条において「特別介護保険料負担被保険者等」という。)に係る特別介護保険料額は、次号に規定する基準介護保険料額に当該特別介護保険料負担被保険者等に係る介護保険第二号被保険者である被保険者及び被扶養者の合計数を乗じて得た額を上回るものでないこと。

二 基準介護保険料額は、次のいずれにも該当するものであること。

イ 一又は二以上の標準報酬月額等の等級区分について一定の額であること。

ロ 標準報酬月額の低い等級区分に属する特別介護保険料負担被保険者等の基準介護保険料額が標準報酬月額の高い等級区分に属する特別介護保険料負担被保険者等の基準介護保険料額を上回るものでないこと。

附則
 (施行期日)
第一条 この勅令は、大正十五年七月一日から施行する。ただし、保険給付及び費用の負担に関する規定は、大正十六年一月一日から施行する。

(市町村民税経過措置対象被保険者に対する高額療養費の支給に関する特例)
第二条 市町村民税経過措置対象被保険者の被扶養者が同一の月にそれぞれ一病院等から受けた療養に係る高額療養費については、第四十一条第一項中「次項又は第三項」とあるのは、「第三項又は附則第二条第二項」と読み替えて、同項の規定を適用する。この場合において、第四十三条第三項中「第一項各号」とあるのは「第一項第二号又は第三号」と、「第四十一条第一項から第三項まで」とあるのは「第四十一条第三項又は附則第二条第二項」と、「当該各号」とあるのは「当該各号ハ」と、同条第八項及び第九項中「第四十一条」とあるのは「第四十一条第三項から第六項まで、附則第二条第一項の規定により読み替えて適用する第四十一条第一

項及び附則第二条第二項」と読み替えて、これらの規定を適用する。

2 市町村民税経過措置対象被保険者の被扶養者が同一の月に一病院等から療養(七十歳に達する日の属する月の翌月以後の療養に限る。以下この項において同じ。)を受けた場合において、当該市町村民税経過措置対象被保険者に対して支給される高額療養費の額は、第四十一条第二項の規定にかかわらず、同項の規定により支給されるべき高額療養費の額に、当該被扶養者ごとに算定した第二号に掲げる額から第一号に掲げる額を控除した額(当該額が零を下回る場合は、零とする。)を合算した額を加算した額とする。

一 七十歳以上一部負担金等世帯合算額から高額療養費算定基準額を控除した額(当該額が零を下回る場合には、零とする。)に、被扶養者按分率(市町村民税経過措置対象被保険者の被扶養者が同一の月に受けた療養に係る第四十一条第二項各号に掲げる額を合算した額から同条第三項の規定により支給される高額療養費の額を控除した額(次号において「被扶養者一部負担金等合算額」という。))を七十歳以上一部負担金等世帯合算額で除して得た率をいう。

二 被扶養者一部負担金等合算額から高額療養費算定基準額を控除した額

3 第一項の規定により読み替えて適用する第四十一条第一項の高額療養費算定基準額については、第四十二条第一項(第三号を除く。)中「前条第一項」とあるのは「附則第二条第一項の規定により読み替えて適用する前条第一項」と、「次号又は第三号」とあるのは「次号」と、「同条第一項又は第二項」とあるのは「同条第一項若しくは第二項又は附則第二条第一項の規定により読み替えて適用する前条第一項若しくは附則第二条第二項」と、「以下この条並びに次条第一項第一号イからハまで並びに第二号イ及びロ」とあるのは「次号」と、「被保険者」とあるのは「附則第二条第七項に規定する市町村民税経過措置対象被保険者」と読み替えて、同項(第三号を除く。)を適用する。

4 第四十二条第二項(第三号及び第四号を除く。)の規定は、第二項第一号の高額療養費算定基準額について準用する。この場合において、同条第二項中「前条第二項」とあるのは「附則第二条第二項第一号」と、「次号から第

四号まで」とあるのは「次号」と、「高額療養費多数回該当の場合」とあるのは「当該療養費あつた月以前の十一月以内に既に高額療養費(前条第一項若しくは第二項又は附則第二条第一項の規定により読み替えて適用する前条第一項若しくは附則第二条第二項の規定によるものに限る。)が支給されている月数が三月以上ある場合」と読み替えるものとする。

5 第二項第二号の高額療養費算定基準額は、第四十二条第三号に定める額とする。

6 市町村民税経過措置対象被保険者の被扶養者に係る第四十二条第三項の高額療養費算定基準額は、同項の規定にかかわらず、同項第三号に定める額とする。

7 第一項、第二項及び前項の市町村民税経過措置対象被保険者は、被保険者のうち、次の各号のいずれかに該当するものとする。

一 その被扶養者の療養のあつた月が平成十八年八月から平成十九年七月までの場合にあつては、地方税法等の一部を改正する法律(平成十七年法律第五号)附則第六条第二項に該当する者

二 その被扶養者の療養のあつた月が平成十九年八月から平成二十年七月までの場合にあつては、地方税法等の一部を改正する法律附則第六条第四項に該当する者

8 前各項の規定は、前項各号のいずれかに該当する日雇特例被保険者に係る高額療養費の支給について準用する。

(退職者給付抛出現金の経過措置)
第三条 国民健康保険法附則第十条第一項の規定により社会保険診療報酬支払基金が同項に規定する抛出現金を徴収する間、第二十条中「及び法第七十三条」とあるのは、「法第七十三条」と、「並びに」とあるのは「及び国民健康保険法(昭和三十三年法律第九十二号)附則第十条第一項に規定する抛出現金(以下「退職者給付抛出現金」という。))並びに」と、第二十九条中「及び日雇抛出現金」とあるのは、「日雇抛出現金及び退職者給付抛出現金」と、第三十三条の三第一項第八号中「国民健康保険法(昭和三十三年法律第九十二号)」とあるのは「国民健康保険法」と、第四十六条、第六十五条第一項第一号及び第六十七条第三項中「及び日雇抛出現金」とあるのは、「日雇抛出現金及び退職者給付抛出現金」とする。

第四條 平成三十六年三月三十一日までの間、前条の規定により読み替えられた第二十條中「法第七十三條」とあるのは「同法附則第七條第一項に規定する病床転換支援金等（以下「病床転換支援金等」という。）、法第七十三條」と、前条の規定により読み替えられた第二十九條、第四十六條、第六十五條第一項第一号及び第六十七條第三項中「日雇拋出金」とあるのは「病床転換支援金等、日雇拋出金」とする。
 （指定健康保険組合の指定の要件及び健康保険組合の準備金の積立てに関する特例）

第五條 第二十九條及び第四十六條第二項の適用については、当分の間、これらの規定中「二分の三」とあるのは、「十二分の二」とする。
 （特例措置対象被保険者等に係る高額療養費の支給に関する経過措置）

第六條 法第七十四條第一項第二号の規定が適用される被保険者又は法第七十條第二項第一号ハの規定が適用される被扶養者のうち、平成二十一年四月から平成三十一年三月までの間に、特定給付対象療養（第四十一條第一項第二号に規定する特定給付対象療養をい、これらの者に對する医療に関する給付であつて厚生労働大臣が定めるものが行われるべき療養に限る。）を受けたもの（次項において「特例措置対象被保険者等」という。）に係る第四十一條第六項の規定による高額療養費の支給については、同項中「及び当該被保険者」とあるのは、「当該被保険者」と、「を除く」とあるのは、「及び附則第六條第一項に規定する厚生労働大臣が定める給付が行われるべき療養を除く」と読み替えて、同項の規定を適用する。

第七條 平成二十五年及び平成二十六年に於いては、第四十五條の二第一号二中「一の事業年度において取り崩すことが見込まれる準備金の額その他健康保険事業」とあるのは、「健康保険事業」とする。

第八條 子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十四法律第六十七号）第三十八條の規定によりその徴収についてなお従前の例によるものとされた同法第三十六條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）第二十二條の拋出金に関する第六十三條の規定の適用については、同条第三号中「による拋出金」とあるのは、「による拋出金、子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十四法律第六十七号）第三十八條の規定によりその徴収についてなお従前の例によるものとされた同法第三十六條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）第二十二條の拋出金に関する第六十三條の規定の適用される旧児童手当法に係る特例）

第九條 平成二十二年及び二十三年に於ける子ども手当の支給に関する法律（平成二十二年法律第十九号）第二十二條第一項の規定により適用される児童手当法の一部を改正する法律（平成二十四法律第二十四号）附則第十一條の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第一條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）の規定による拋出金」とする。

（平成二十三年に於ける子ども手当の支給等に関する特別措置法により適用される旧児童手当法に係る特例）

第十條 平成二十三年に於ける子ども手当の支給等に関する特別措置法（平成二十三年法律第七十七号）第二十二條第一項、第三項及び第五項の規定により適用される児童手当法の一部を改正する法律附則第十二條の規定によりなおその効力を有するものとされた旧児童手当法第二十二條の拋出金に関する第六十三條の規定の適用については、同条第三号中「による拋出金」とあるのは、「による拋出金、平成二十三年に於ける子ども手当の支給等に関する特別措置法（平成二十三年法律第七十七号）第二十二條第一項、第三項及び第五項の規定により適用される児童手当法の一部を改正する法律（平成二十四法律第二十四号）附則第十二條の規定によりなおその効力を有するものとされた同法第一條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）の規定による拋出金」とする。
 （法附則第八條の三の規定により読み替えられた法第六十條第三項第三号の政令で定める額）

第十一條 法附則第八條の三の規定により読み替えられた法第六十條第三項第三号の政令で定める額は、平成二十二年から平成二十四年度までの各事業年度ごとに法第七條の三十一の規定による短期借入金金の償還に要する費用の額に充てるべき額として、当該各事業年度の前事業年度末における同条第二項ただし書の規定による短期借入金金の借換えの予定額その他の厚生労働省令で定める額を基礎として、協会が管掌する健康保険の財政状況、当該各事業年度の初日から平成二十五年三月三十一日までの期間等を勘案して、厚生労働大臣が財務大臣と協議して定める額とする。

附則（昭和四年五月二九日勅令第一四三号）
 本令ハ昭和四年六月一日ヨリ之ヲ施行ス
附則（昭和十三年一月一日勅令第二〇号）
 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
附則（昭和十五年六月一日勅令第三七三号）抄
 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ第七十九條ノ二、第七十九條ノ三及第八十七條ノ二乃至第八十七條ノ四ノ規定並ニ第八十九條ノ二ノ規定中第七十九條ノ三及第八十七條ノ二ノ規定ニ關スル部分ハ昭和十四年法律第七十四號中第一條第二項、第七條第二項、第四十七條第二項第三項、第六十二條第四項及第六十九條ノ二ノ規定並ニ第七十六條ノ改正規定施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則（昭和十七年一月二四日勅令第三五号）
 本令ハ昭和十七年二月一日ヨリ之ヲ施行ス
 昭和十六年勅令第六十四号ハ之ヲ廢止ス
 本令施行ノ際現ニ被保險者ノ資格ヲ有スル者及本令施行後昭和十七年三月三十一日迄ノ間ニ被保險者ノ資格ヲ取得シタル者ノ標準報酬ニシテ同期間内ニ於テ効力ヲ有スルモノハ従前ノ規定ニ依ルモノトス
 本令施行ノ際現ニ被保險者ノ資格ヲ有シ昭和十七年四月一日迄引續キ被保險者ノ資格ヲ有スル者ノ標準報酬ニシテ同年同月同日以後効力ヲ有スルモノハ第三條乃至第五條ノ改正規定ニ依ル此ノ場合ニ於テ其ノ者ハ第四條第一項ノ改正規定ノ適用ニ付本令施行ノ日ニ於テ被保險者ノ資格ヲ取得シタルモノト看做ス
 前項ノ規定ニ依リ標準報酬ヲ定ムル場合ニ於テハ第五條第三号ノ改正規定中一月間トアルハ三月間トシ報酬ノ額トアルハ報酬ノ額ノ三分ノ一トス
 本令施行後昭和十七年三月三十一日迄ノ間ニ被保險者ノ資格ヲ取得シ同年四月一日迄引續キ被保險者ノ資格ヲ有スル者ノ標準報酬ニシテ同年四月一日以後効力ヲ有スルモノハ第三條乃至第五條ノ改正規定ニ依ル此ノ場合ニ於テ其ノ者ハ第四條第一項ノ規定ニ依リ標準報酬ニシテ本令施行前監督官庁ノ認可ヲ受ケタルモノハ第五十二條ノ改正規定ニ依リ規約ヲ以テ定メタルモノト看做ス
附則（昭和十七年二月一〇日勅令第八二六号）抄
 本令ハ昭和十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和十七年法律第三十八號中第一條第二項、第十三條及第四十五條ノ改正規定並ニ第十三條ノ二、第四十三條ノ三乃至第四十三條ノ五及第五十九條ノ二ノ規定実施ノ為ニ予メ必要ナル範圍内ニ於テハ昭和十八年一月一日ヨリ之ヲ施行ス
 職員健康保險法施行令ハ之ヲ廢止ス
 前項ノ規定施行前ノ職員健康保險ノ保險給付及保險料其ノ他ノ徴収金ニ關シテハ仍従前ノ例ニ依ル

（子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十四法律第六十七号）第三十八條の規定によりその徴収についてなお従前の例によるものとされた同法第三十六條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）第二十二條の拋出金に関する第六十三條の規定の適用については、同条第三号中「による拋出金」とあるのは、「による拋出金、子ども・子育て支援法及び就学前の子どもに関する教育、保育等の総合的な提供の推進に関する法律の一部を改正する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律（平成二十四法律第六十七号）第三十八條の規定によりその徴収についてなお従前の例によるものとされた同法第三十六條の規定による改正前の児童手当法（昭和四十六年法律第七十三号）第二十二條の拋出金に関する第六十三條の規定の適用される旧児童手当法に係る特例）

第二項ノ規定施行ノ際現ニ職員健康保険ノ被
保険者タリシ者ニシテ引続キ健康保険ノ被保險
者ト為リタルモノニ付テハ職員健康保険法ニ基
キ其ノ者ニ付定メタル標準報酬ヲ以テ其ノ者ノ
健康保険法ニ基キ定メタル標準報酬トス但シ同
項ノ規定施行ノ月ヨリ職員健康保険法施行令第
四條第二項ノ規定ニ依リ其ノ者ノ標準報酬ヲ変
更スベカリシ場合ニ在リテハ同月ヨリ第四條第
二項ノ規定ニ準ジ其ノ者ノ標準報酬ヲ變更ス

第二項ノ規定施行前職員健康保険ノ被保險者
ノ資格ヲ喪失シタル者ニシテ昭和十七年法律第
三十八号附則第七項ニ依リ健康保険ノ保險給付
ヲ受クルモノノ保險給付ニ関シテハ其ノ資格喪
失ノ際ニ於ケル標準報酬ニ依ル

第二項ノ規定施行前職員健康保険法及職員健
康保険法施行令ニ基キテ為シタル命令又ハ処分
ハ健康保険法及健康保険法施行令中ノ相当規定
ニ基キテ之ヲ為シタルモノト看做ス

第二項ノ規定施行前職員健康保険法及職員健
康保険法施行令ニ基キテ為シタル申請ハ健康保
險法及健康保険法施行令中ノ相当規定ニ基キテ
之ヲ為シタルモノト看做ス

前五項ニ定ムルモノノ外第二項ノ規定施行ノ
際必要ナル事項ハ厚生大臣之ヲ定ム

附則 (昭和十九年五月二四日勅令第三
六四号) 抄

本令ハ昭和十九年六月一日ヨリ之ヲ施行ス但
シ第一條、第七十八條ノ二、第七十九條ノ二、
第八十二條、第八十七條ノ四、第九十二條、
第九十二條、第九十四條、第九十四條ノ二及第九
十七條ノ二ノ改正規定並ニ第八十三條ノ二、第
八十四條ノ三及附則第五項及同第六項ノ規定ハ
昭和十九年法律第二十一号附則第十六條ノ規定
施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

昭和十九年六月一日前ニ被保險者ノ資格ヲ取
得シ同年同月同日迄引続キ被保險者ノ資格ヲ有
スル者ノ同年同月同日ニ於ケル標準報酬ノ等級
ガ從前ノ同年同月同日ニ於ケル第十五級ニ該當ス
ル場合ニ於テハ其ノ者ハ第四條第一項ノ規定ノ
適用ニ付同年同月同日ニ於テ被保險者ノ資格ヲ
取得シタルモノト看做ス

第九條ノ三ノ改正規定ニ依リ新ニ被保險者ト
為リタル者ハ健康保険法施行令中保險給付及費
用ノ負担ニ関スル規定ノ適用ニ付テハ昭和十九
年法律第二十一号附則第十六條ノ規定施行ノ日
ノ前日迄ハ被保險者タラザルモノト看做ス

附則 (昭和二〇年七月一六日勅令第四
一六号)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
本令施行ノ日ノ属スル月ノ前月ノ保險料ノ納
期ニ付テハ第百條第一項ノ改正規定ニ拘ラズ仍
從前ノ例ニ依ル

附則 (昭和二二年四月一日勅令第一八
五号)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
昭和二十一年三月ノ保險料ノ納付ニ付テハ第
百條第一項ノ改正規定ニ依ル

本令施行前ニ被保險者ノ資格ヲ取得シ同令施
行ノ日迄引続キ被保險者ノ資格ヲ有スル者ノ標
準報酬ニ付テハ其ノ者ハ同日ニ於テ被保險者ノ
資格ヲ取得シタルモノト看做シ健康保険法施行
令第四條第一項ノ規定ヲ適用ス

附則 (昭和二二年六月一七日政令第九
〇号)

この政令中第二條第一項、第三條、第五條ノ
二第二項、第五條ノ三、第九條ノ三、第九條ノ
四、第九條ノ五(第一項第一号ノ改正規定を除
く)、第九條ノ六、第十條ノ二、第十五條第二
項、第二十三條第三項、第三十九條、第四十五
條第一項、第四十九條、第五十四條、第五十五
條、第六十七條第三項、第七十一條第一項、第
七十三條、第七十三條ノ九、第七十五條、第
七十八條ノ二、第七十八條ノ三、第八十一條、第
八十七條ノ二、第八十七條ノ七乃至第八十七條
ノ九、第八十九條乃至第九十三條、第九十四條
ノ三及び第九十五條第二項ノ改正規定並ニ第
七十九條ノ三及び第八十七條ノ十ノ規定は、昭
和二十二年六月一日から、これを適用し、その
他の規定は、労働者災害補償保険法施行の日か
ら、これを施行する。

昭和二十二年六月一日前に被保險者ノ資格を
取得し、同日まで引き続き被保險者ノ資格を有
する者ノ標準報酬については、その者は、同日
において被保險者ノ資格を取得したものとみな
す。

附則 (昭和二八年八月三二日政令第二
三八号)

この政令は、昭和二十八年九月一日から施行
する。

附則 (昭和三二年四月三〇日政令第八
六号)

この政令は、昭和三十二年五月一日から施行
する。

附則 (昭和三七年六月二八日政令第二
六五号)

この政令は、昭和三十七年七月一日から施行
する。

附則 (昭和三七年九月二九日政令第三
九一号)

1 この政令は、行政不服審査法(昭和三十七年
法律第六十号)の施行の日(昭和三十七年十
月一日)から施行する。
2 この政令による改正後の規定は、この政令の
施行前にされた行政庁の処分その他この政令の
施行前に生じた事項についても適用する。ただ
し、この政令による改正前の規定によつて生じ
た効力を妨げない。

3 この政令の施行前に提起された訴願、審査の
請求、異議の申立てその他不服申立て(以下
「訴願等」という。)については、この政令の施
行後も、なお従前の例による。この政令の施行
前にされた訴願等の裁決、決定その他の処分
(以下「裁決等」という。)又はこの政令の施行
前に提起された訴願等につきこの政令の施行後
にされる裁決等にさらに不服がある場合の訴願
等についても、同様とする。

4 前項に規定する訴願等で、この政令の施行後
は行政不服審査法による不服申立てをすること
ができることとなる処分に係るものは、この政
令による改正後の規定の適用については、同法
による不服申立てとみなす。

附則 (昭和四一年六月九日政令第一七
八号) 抄

附則 (昭和四七年一月二〇日政令第二
号)

この政令は、昭和四十七年二月一日から施行
する。

附則 (昭和四八年一〇月一日政令第二
八八号)

この政令は、公布の日から施行する。

附則 (昭和五一年七月二七日政令第二
〇一号)

この政令は、昭和五十一年八月一日から施行
する。

附則 (昭和五六年二月二一日政令第一
四号)

この政令は、健康保険法等の一部を改正する
法律の施行の日(昭和五十六年三月一日)から
施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令
第七十四條の次に六条及び一章を加える改正規
定(同令第七十八條及び第四章に係る部分を除

く)、第三条中船員保険法施行令第三条の二の
次に四條を加える改正規定(同令第三条の二の
二に係る部分を除く。)及び同令第四条の六の
次に二條を加える改正規定、及び同令中国家公務
員共済組合法施行令第十一条の三の次に四
條を加える改正規定(同令第十一条の三の三に
係る部分を除く)、第五条中公共企業体職員等
共済組合法施行令第一条の二の五の前に三條を
加える改正規定及び同令第四条の八第二項の改
正規定、第六條中地方公務員等共済組合法施行
令第二十三條の二の次に四條を加える改正規定
(同令第二十三條の三に係る部分を除く。)並び
に第七條の規定(私立学校教職員共済組合法施
行令第十条の五の改正規定を除く。)は、同年
四月一日から施行する。

附則 (昭和五七年八月二四日政令第二
三二号)

(施行期日)
第一条 この政令は、昭和五十七年九月一日から
施行する。

(経過措置)
第二条 昭和五十七年九月一日から老人保健法
(昭和五十七年法律第八十号) 附則第一条本文
の政令で定める日の前日までの間において七十
歳以上の者又は六十五歳以上七十歳未満の者で
あつて寝たきりの状態その他の障害の状態にあ
るものうち主務大臣が定める者が受ける療養
に係る健康保険法、船員保険法、国家公務員共
済組合法、公共企業体職員等共済組合法、地方
公務員等共済組合法若しくは私立学校教職員共
済組合法の規定による家族高額療養費又は国民
健康保険法の規定による高額療養費の支給につ
いての第一条の規定による改正後の同条各号に
掲げる政令の規定又は第二条の規定による改正
後の国民健康保険法施行令第二十九條の二第一
項の規定の適用(私立学校教職員共済組合法施
行令(昭和二十八年政令第四百二十五号) 第十
一條の五において国家公務員共済組合法施行令第
十一條の三の三第一項及び第二項の規定を準用
する場合を含む。)については、これらの規定
中「五万円」とあるのは、「三万円九千円」と
する。

前項の主務大臣は、健康保険法若しくは船員
保険法の規定による家族高額療養費又は国民健
康保険法の規定による高額療養費に係る療養を
受ける者については厚生大臣、国家公務員共済
組合法の規定による家族高額療養費に係る療養

を受ける者については大蔵大臣、公共企業体職員等共済組合の規定による家族高額療養費に係る療養を受ける者については同法第八十四条の規定による主務大臣、地方公務員等共済組合の規定による家族高額療養費に係る療養を受ける者については自治大臣、私立学校教職員共済組合の規定による家族高額療養費に係る療養を受ける者については文部大臣とする。

第三条 昭和五十七年九月一日から同年十二月三十一日まで

の間に前条第一項に規定する者以外の者が受ける療養に係る健康保険法、船員保険法、国家公務員共済組合法、公共企業体職員等共済組合法、地方公務員等共済組合法若しくは私立学校教職員共済組合法の規定による家族高額療養費又は国民健康保険法の規定による高額療養費の支給については、第一条の規定による改正後の同条各号に掲げる政令の規定又は第二条の規定による改正後の国民健康保険法施行令第二十九条の第二項及び第二項の規定の適用（私立学校教職員共済組合法施行令第十条の五において国家公務員共済組合法施行令第十一条の三の第三項及び第二項の規定を準用する場合を含む。）については、これらの規定中「五万千円」とあるのは、「四万五千円」とす

附則（昭和五十八年一月二日政令第六号）抄

第一条 この政令は、老人保健法の施行の日（昭和五十八年二月一日）から施行する。

附則（昭和五十九年九月七日政令第二六八号）抄

第一条 この政令は、健康保険法等の一部を改正する法律の施行の日（昭和五十九年十月一日）から施行する。

第二条 日雇労働者健康保険法施行令（昭和二十八年政令第三三十一号）は、廃止する。

（任意継続被保険者の保険料等の前納に係る経過措置）

第三条 この政令の施行の日の前日において、健康保険法（大正十一年法律第七十号）第二十条又は船員保険法（昭和十四年法律第七十三号）第十九条ノ三の規定による被保険者の資格を有する者は、この政令による改正後の健康保険法施行令第八十一条第一項本文又は船員保険法施行令第七

条第一項本文の規定にかかわらず、昭和五十九年十一月から昭和六十年三月までの期間について健康保険法第七十九条ノ二第一項又は船員保険法第六十二条ノ三第一項の規定による保険料の前納を行うことができる。

この政令の施行の日の前日において、国家公務員等共済組合法（昭和三十三年法律第二百二十八号）第二百六条の五第二項（私立学校教職員共済組合法（昭和二十八年法律第二百四十五号）第二十五条第一項において準用する昭和三十七年法律第五十二号）第四百四十四条の第二項に規定する任意継続組合員の資格を有する者は、この政令による改正後の国家公務員等共済組合法施行令第五十三条本文、地方公務員等共済組合法施行令第四十九条の二本文又は私立学校教職員共済組合法施行令第十条の二十二本文の規定にかかわらず、昭和五十九年十一月から昭和六十年三月までの期間について国家公務員等共済組合法第二百六条の五第三項（私立学校教職員共済組合法第二百二十五条第一項において準用する場合を含む。）又は地方公務員等共済組合法第四百四十四条の二第三項の規定による任意継続掛金の前納を行うことができる。

昭和五十九年度の日雇拠出金の納期は、昭和六十年三月三十一日とする。

附則（昭和六十年三月一日政令第二八号）抄

第一条 この政令は、昭和六十年四月一日から施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項の改正規定、第二条中船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項の改正規定並びに第三条の規定は、公布の日から施行する。

第二条 この政令による改正後の健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項、船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項並びに国民健康保険法施行令第二十九条の二第六項及び第七項の規定は、昭和六十年一月一日以降に行われた療養に係る高額療養費の支給について適用する。

（経過措置）

この政令の施行の日前に死亡し又は分娩した健康保険の被保険者（日雇特別被保険者を除く。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者又は配偶者若しくはは被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費若しくは配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

附則（昭和六十年三月一日政令第二八号）抄

第一条 この政令は、昭和六十年四月一日から施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項の改正規定、第二条中船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項の改正規定並びに第三条の規定は、公布の日から施行する。

第二条 この政令による改正後の健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項、船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項並びに国民健康保険法施行令第二十九条の二第六項及び第七項の規定は、昭和六十年一月一日以降に行われた療養に係る高額療養費の支給について適用する。

（経過措置）

この政令の施行の日前に死亡し又は分娩した健康保険の被保険者（日雇特別被保険者を除く。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者又は配偶者若しくはは被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費若しくは配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

附則（平成元年五月三十一日政令第一六号）抄

第一条 この政令は、平成元年六月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成元年五月三十一日政令第一六号）抄

この政令は、平成元年六月一日から施行する。

この政令は、平成元年六月一日から施行する。

附則（昭和六十年三月一日政令第二八号）抄

第一条 この政令は、平成元年六月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成元年五月三十一日政令第一六号）抄

第一条 この政令は、平成元年六月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成三年四月二六日政令第一四八号）抄

第一条 この政令は、平成三年五月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成四年三月三十一日政令第七八号）抄

第一条 この政令は、平成四年四月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に分娩した健康保険又は船員保険の被保険者（健康保険の日雇特別被保険者を含む。以下同じ。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費又は配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

附則（平成四年三月三十一日政令第七八号）抄

第一条 この政令は、平成四年四月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に分娩した健康保険又は船員保険の被保険者（健康保険の日雇特別被保険者を含む。以下同じ。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費又は配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

附則（平成四年六月一七日政令第二〇〇号）抄

この政令は、平成四年六月一日から施行する。

この政令は、平成五年五月一日から施行する。

附則（平成五年四月七日政令第一四三号）抄

第一条 この政令は、平成五年五月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成六年九月二日政令第二八二号）抄

第一条 この政令は、平成六年十月一日から施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令第二十九条の二の二第六項及び第七項の改正規定、第二条中船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項の改正規定並びに第三条の規定は、公布の日から施行する。

第二条 この政令による改正後の健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項、船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項並びに国民健康保険法施行令第二十九条の二第六項及び第七項の規定は、平成六年一月一日以降に行われた療養に係る高額療養費の支給について適用する。

（経過措置）

この政令の施行の日前に死亡し又は分娩した健康保険の被保険者（日雇特別被保険者を除く。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者又は配偶者若しくはは被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費若しくは配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

附則（平成六年二月一四日政令第三八九号）抄

第一条 この政令は、平成七年四月一日から施行する。

第二条 この政令の施行の際現に第一条の規定による改正前の健康保険法施行令第五十四条（同

法第五十四条）の規定にかかわらず、昭和五十九年十一月から昭和六十年三月までの期間について健康保険法第七十九条ノ二第一項又は船員保険法第六十二条ノ三第一項の規定による保険料の前納を行うことができる。

この政令の施行の日の前日において、国家公務員等共済組合法（昭和三十三年法律第二百二十八号）第二百六条の五第二項（私立学校教職員共済組合法（昭和二十八年法律第二百四十五号）第二十五条第一項において準用する昭和三十七年法律第五十二号）第四百四十四条の第二項に規定する任意継続組合員の資格を有する者は、この政令による改正後の国家公務員等共済組合法施行令第五十三条本文、地方公務員等共済組合法施行令第四十九条の二本文又は私立学校教職員共済組合法施行令第十条の二十二本文の規定にかかわらず、昭和五十九年十一月から昭和六十年三月までの期間について国家公務員等共済組合法第二百六条の五第三項（私立学校教職員共済組合法第二百二十五条第一項において準用する場合を含む。）又は地方公務員等共済組合法第四百四十四条の二第三項の規定による任意継続掛金の前納を行うことができる。

昭和五十九年度の日雇拠出金の納期は、昭和六十年三月三十一日とする。

附則（昭和六十年三月一日政令第二八号）抄

第一条 この政令は、昭和六十年四月一日から施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項の改正規定、第二条中船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項の改正規定並びに第三条の規定は、公布の日から施行する。

第二条 この政令による改正後の健康保険法施行令第七十九条第六項及び第七項、船員保険法施行令第三条の二の二第六項及び第七項並びに国民健康保険法施行令第二十九条の二第六項及び第七項の規定は、昭和六十年一月一日以降に行われた療養に係る高額療養費の支給について適用する。

（経過措置）

この政令の施行の日前に死亡し又は分娩した健康保険の被保険者（日雇特別被保険者を除く。）若しくは被保険者であつた者又は被扶養者又は配偶者若しくはは被扶養者に係る健康保険法第十九条の規定による分擔費若しくは配偶者分擔費の額については、なお従前の例による。

令第七十三条ノ九において準用する場合を含む。）の規定による変更の認可（第一条の規定による改正後の同令第五十四条第一項ただし書（同令第七十三条ノ九において準用する場合を含む。）の厚生省令で定める事項に係るものに限る。）の申請を行っている者は、第一条の規定による改正後の健康保険法施行令第五十四条第二項（同令第七十三条ノ九において準用する場合を含む。）の規定による届出を行った者とみなす。

附則（平成七年二月一七政令第二六号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成七年七月一日（以下「施行日」という。）から施行する。

附則（平成八年五月一七政令第一四八号）抄

（施行期日）

1 この政令は、平成八年六月一日から施行する。

2 この政令の施行の日前に行われた療養に係る高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成九年八月一日政令第二五六号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成九年九月一日から施行する。

附則（平成九年八月二九日政令第二六七号）抄

（施行期日）

この政令は、平成九年九月一日から施行する。

附則（平成一〇年七月一〇日政令第二四八号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、国民健康保険法等の一部を改正する法律の一部の施行の日（平成十年八月一日）から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）

第二条 この政令の施行の際現に第二条の規定による改正前の健康保険法施行令第四十五条第一項（同令第七十三条ノ九において準用する場合を含む。）の規定により認可を受けている健康保険組合若しくは健康保険組合連合会又はその申請を行つては健康保険組合若しくは健康保険組合連合会は、第二条の規定による改正後の

健康保険法施行令第四十五条第一項（同令第七十三条ノ九において準用する場合を含む。）の規定による届出を行ったものとみなす。

附則（平成一二年九月三日政令第二六二号）抄

この政令は、平成十二年四月一日から施行する。

附則（平成一二年二月八日政令第三九三号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十二年四月一日から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）

第二条 この政令の施行の際現に第一条の規定による改正前の健康保険法施行令（以下この条において「旧政令」という。）第七十三条の規定により都道府県知事に対してされている旧政令第二十三条第三項若しくは第三十九条の規定による申立若しくは請求又はこの政令の施行前に旧政令第七十三条の規定により都道府県知事がした旧政令第三十九条、第四十九条、第五十四条第一項、第五十五条若しくは第七十一条の規定による指揮、認可若しくは命令は、この政令の施行の日（以下「施行日」という。）以後における第一号の規定による改正後の健康保険法施行令（以下この条において「新政令」という。）の適用については、それぞれ新政令第七十三条の規定により地方社会保険事務局長に対してされた新政令第二十三条第三項若しくは第三十九条の規定による申立若しくは請求又は新政令第七十三条の規定により地方社会保険事務局長がした新政令第三十九条、第四十九条、第五十四条第一項、第五十五条若しくは第七十一条の規定による指揮、認可若しくは命令とみなす。

2 この政令の施行前に旧政令第七十三条の規定により都道府県知事に対し旧政令第四十五条第一項及び第五十四条第二項の規定により届出をしなければならぬ事項で、施行日前にその手続がされていないものについては、これを、それぞれ新政令第七十三条の規定により地方社会保険事務局長に対し新政令第四十五条第一項及び第五十四条第二項の規定により届出をしなければならぬ事項についてその手続がされていないものとみなして、新政令を適用する。

附則（平成一二年六月七日政令第三〇九号）抄

（施行期日）

1 この政令は、内閣法の一部を改正する法律（平成十一年法律第八十八号）の施行の日（平成十三年一月六日）から施行する。

附則（平成一二年二月一三日政令第五〇八号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十三年一月一日から施行する。ただし、第一条中健康保険法施行令第七十八条を削り、同令第七十七条を同令第七十八条とし、同令第七十六条の次に二条を加える改正規定及び同令第八十二条第一項の改正規定（五分五厘を「四分」に改める部分に限る。）、第五条の規定、第九条の規定（国家公務員共済組合法施行令第十一条の三の二、第十二条及び第三十四条の改正規定に係る部分を除く。）、第十条の規定（地方公務員等共済組合法施行令第二十三条の三の改正規定に係る部分を除く。）並びに第十一条中私立学校教職員共済法施行令第五条の改正規定（「第十一条の三の四」を「から第十一条の三の五まで」に改める部分に限る。）、同令第六条の改正規定、同令第十五条の改正規定及び同令第十八条の改正規定は、平成十三年四月一日から施行する。

附則（平成一四年三月一三日政令第四三三号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十四年四月一日から施行する。

附則（平成一四年八月三〇日政令第二八二号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十四年十月一日から施行する。

附則（平成一四年一月一三日政令第三三三三号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十五年一月一日から施行する。

附則（平成一四年一月二七日政令第三四八号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十五年四月一日から施行する。

附則（平成一五年一〇月二二日政令第四六一号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、公布の日から施行する。

（健康保険法施行令及び船員保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）

第三条 第二条の規定による改正後の健康保険法施行令第四十二条第二項第四号及び船員保険法施行令第十條第二項第四号の規定は、療養のあつた月が平成十六年八月以後の場合における高額療養費算定基準額について適用し、療養のあつた月が同年七月までの場合における高額療養費算定基準額については、なお従前の例による。

附則（平成一六年一〇月二〇日政令第三一八号）抄

（施行期日）

1 この政令は、破産法の施行の日（平成十七年一月一日）から施行する。

（罰則の適用に関する経過措置）

2 この政令の施行前にした行為に対する罰則の適用については、なお従前の例による。

附則（平成一六年一月八日政令第三四七号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、公布の日から施行する。

（健康保険法施行令及び船員保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）

第三条 第二条の規定による改正後の健康保険法施行令第四十二条第二項第四号及び船員保険法施行令第十條第二項第四号の規定は、療養のあつた月が平成十七年八月以後の場合における高額療養費算定基準額について適用し、療養のあつた月が同年七月までの場合における高額療養費算定基準額については、なお従前の例による。

附則（平成一六年一月二五政令第三九四号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、平成十七年四月一日から施行する。

附則（平成一七年五月二日政令第一七三三三号）抄

（施行期日）

第一条 この政令は、公布の日から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）

第三条 第二条の規定による改正後の健康保険法施行令（次項において「新健保法施行令」という。）第三十四条第二項の規定は、療養の給付を受ける月が平成十七年九月以後の場合における健康保険法第七十四条第一項第三号の報酬の

に該当したことににより施行日前若しくは施行日以後に指定訪問看護事業者に係る同法第八十八条第一項の指定を取り消された者に係る当該取消しについては、適用しない。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）
第三条 施行日前に死亡し又は出産した被保険者若しくは日雇特例被保険者若しくはこれらの者であった者又は被扶養者に係る健康保険法の規定による埋葬料及び同法第百条第二項（同法第百五十二条において準用する場合を含む。）若しくは第百三十六条第二項の規定によりなされる給付若しくは同法の規定による家族埋葬料又は同法の規定による出産育児一時金若しくは家族出産育児一時金の額については、なお従前の例による。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）
第四条 施行日前に行われた療養に係る健康保険法の規定による高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成一八年九月二六日政令第三二二号）
この政令は、平成十八年十月一日から施行する。

附則（平成一八年二月二〇日政令第三九〇号）抄

（施行期日）
第一条 この政令は、平成十九年四月一日から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）
第二条 この政令の施行の日（以下「施行日」という。）前に行われた療養に係る健康保険法の規定による高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成一九年三月二日政令第三九号）

この政令は、一般社団法人及び一般財団法人に関する法律の施行の日から施行する。

附則（平成二〇年三月三十一日政令第一一六号）抄

（施行期日）
第一条 この政令は、平成二十年四月一日から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）
第二十八条 健康保険法施行令第三十四条第二項の規定は、療養を受ける日がこの政令の施行の日（以下「施行日」という。）以後の場合について適用し、療養を受ける日が施行日前の場合については、なお従前の例による。

この政令は、平成二十年四月一日から施行する。

2 健康保険法施行令第三十四条第二項に規定する被保険者及びその被扶養者について、療養の給付又は当該被扶養者の療養を受ける日が平成二十年四月から八月までの場合にあつては、同項中「及びその被扶養者（七十歳に達する日の属する月の翌月以後である場合に該当する者に限る。）」とあるのは、「並びにその被扶養者（七十歳に達する日の属する月の翌月以後である場合に該当する者に限る。）及びその被扶養者であつた者（法第三条第七項ただし書に該当するに至つたため被扶養者でなくなった者）をいう。以下この項において同じ。」と、「当該被扶養者」とあるのは、「当該被扶養者及び当該被扶養者であつた者」と読み替えて、同項の規定を適用する。

第二十九条 施行日前に行われた療養に係る健康保険法（大正十一年法律第七十号）の規定による家族療養費及び家族訪問看護療養費の支給については、なお従前の例による。

第三十条 施行日前に行われた療養に係る健康保険法の規定による高額療養費の支給については、なお従前の例による。

第三十一条 健康保険法施行令第四十二条第二項に掲げる者のうち、次の各号のいずれかに該当するもの（以下この条において「特定収入被保険者」という。）に係る同令第四十一条第二項の高額療養費算定基準額は、同令第四十二条第二項の規定にかかわらず、第一条の規定による改正前の健康保険法施行令（以下この条において「旧健保令」という。）第四十二条第二項第一号に定める額とする。

一 療養の給付又はその被扶養者（健康保険法施行令第三十四条第二項に規定する被扶養者をいう。以下この号において同じ。）の療養を受ける日が平成二十年四月から八月までの場合における附則第二十八条第二項の規定により読み替えて適用する健康保険法施行令第三十四条第二項の収入の額が六百二十一万円未満である者（被扶養者及び附則第二十八条第二項の規定により読み替えて適用する健康保険法施行令第三十四条第二項に規定する被扶養者であつた者がいない者にあつては、四百八十四万円未満である者）

二 次のイ及びロのいずれにも該当する者
イ 健康保険法施行令第三十四条第二項に規定する被扶養者がいない被保険者であつて、被扶養者であつた者（健康保険法第三

条第七項ただし書に該当するに至つたため被扶養者でなくなった者をいう。以下この号及び附則第三十三条第四項第二号において同じ。）がいるもの
ロ 療養の給付を受ける日が平成二十年九月から十二月までの場合において、その被扶養者であつた者について、健康保険法施行令第三十四条第二項に規定する被扶養者とみなして同項の規定を適用した場合の同項の収入の額が五百二十万円未満である者

2 特定収入被保険者に係る健康保険法施行令第四十一条第三項の高額療養費算定基準額は、同令第四十二条第三項の規定にかかわらず、旧健保令第四十二条第三項第一号に定める額とする。

3 特定収入被保険者が次の各号に掲げる療養を受けた場合において、健康保険法の規定により支払うべき一部負担金の支払が行われなかったときの健康保険法施行令第四十三条第一項の規定により特定収入被保険者について保険者が同項に規定する保険医療機関等に支払う額の限度については、同項各号の規定にかかわらず、当該一部負担金の額から次の各号に掲げる療養の区分に応じ、当該各号に定める額を控除した額とする。

一 健康保険法施行令第四十三条第一項第二号に掲げる療養 旧健保令第四十三条第一項第二号イに定める額
二 健康保険法施行令第四十三条第一項第三号に掲げる療養 旧健保令第四十三条第一項第三号イに定める額

4 特定収入被保険者に対する保険外併用療養費又は家族療養費（第一項第一号に該当する者に係るものに限る。）に係る高額療養費の支給については、健康保険法施行令第四十三条第三項中「当該各号に定める額」とあるのは、「健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第十六号）第一条の規定による改正前の当該各号イに定める額」と読み替えて、同項の規定を適用する。

第三十二条 健康保険法第七十四条第一項第二号の規定が適用される被保険者又は同法第百十条第二項第一号ハの規定が適用される被扶養者のうち、平成二十年四月から十二月までの間に、特定給付対象療養（健康保険法施行令第四十一条第一項第二号に規定する特定給付対象療養をいい、これらの者に対する医療に関する給付で

あつて厚生労働大臣が定めるものが行われるべき療養に限る。）を受けたもの（以下この条において「平成二十年特例措置対象被保険者等」という。）に係る同令第四十一条第四項の規定による高額療養費の支給については、同項中「を除く」とあるのは、「及び健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第十六号）附則第三十二条第一項に規定する厚生労働大臣が定める給付が行われるべき療養を除く」と読み替えて、同項の規定を適用する。

2 平成二十年特例措置対象被保険者等に係る健康保険法施行令第四十一条第二項の高額療養費算定基準額については、同令第四十二条第二項第一号の規定にかかわらず、なお従前の例による。

3 平成二十年特例措置対象被保険者等に係る健康保険法施行令第四十一条第三項の高額療養費算定基準額については、同令第四十二条第三項第一号の規定にかかわらず、なお従前の例による。

4 健康保険法施行令第四十三条第一項の規定により平成二十年特例措置対象被保険者等について保険者が同項に規定する保険医療機関等に支払う額の限度については、同項第二号イ及び第三号イの規定にかかわらず、なお従前の例による。この場合において、同令第四十三条第三項中「当該各号」とあるのは、「健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第十六号）第一条による改正前の当該各号」と読み替えて、同項の規定を適用する。

5 健康保険法施行令第四十三条第四項及び第五項の規定は、平成二十年特例措置対象被保険者等が外来療養（同令第四十一条第三項に規定する外来療養をいう。）を受けた場合において、健康保険法の規定により支払うべき一部負担金の額（同法第百十五号第一項に規定する一部負担金の額をいう。）についての支払が行われなかったときの同令第四十一条第三項の規定による高額療養費の支給について準用する。この場合において、同令第四十三条第四項中「当該療養に要した費用のうち同令第四項から第六項までの規定による高額療養費として被保険者に支給すべき額に相当する額を」とあるのは、「同令第三項の規定による高額療養費について、当該一部負担金の額から健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第十六号）附則第三十二条第三項の規定によりなお

あつて厚生労働大臣が定めるものが行われるべき療養に限る。）を受けたもの（以下この条において「平成二十年特例措置対象被保険者等」という。）に係る同令第四十一条第四項の規定による高額療養費の支給については、同項中「を除く」とあるのは、「及び健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第十六号）附則第三十二条第一項に規定する厚生労働大臣が定める給付が行われるべき療養を除く」と読み替えて、同項の規定を適用する。

従前の例によるものとされた第四十一条第三項の高額療養費算定基準額（当該外来療養につき算定した費用の額に百分の十を乗じて得た額が当該高額療養費算定基準額を超える場合にあっては、当該乗じて得た額）を控除した額の限度において」と、同条第五項中「第四十一条第四項から第六項まで」とあるのは「第四十一条第三項」と読み替えるものとする。

6 前各項の規定は、健康保険法施行令第三十七条に規定する日雇特別被保険者であつて、当該日雇特別被保険者を被保険者とみなして第一項の規定を適用した場合に平成二十年特例措置対象被保険者等に該当することとなるものに係る高額療養費の支給について準用する。

第三十三条 施行日から平成二十一年七月三十一日までの間に受けた療養に係る健康保険法の規定による高額介護合算療養費の支給については、健康保険法施行令第四十三条の二第一項第一号（同条第三項及び第四項並びに同令第四十四条第二項において準用する場合を含む。次項及び第四項において同じ。）中「前年八月一日から七月三十一日まで」とあるのは、「平成二十年四月一日から平成二十一年七月三十一日まで」と読み替えて、同令第四十三条の二から第四十四条（第一項を除く。）までの規定を適用する。この場合において、次の表の上欄に掲げる同令の規定中同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の下欄に掲げる字句とする。

第四十三條の三第六項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第六項）の表	十九万円二十五万円	健康保険法施行令第四十三條の三第六項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第六項）の表	十九万円二十五万円
第四十三條の三第五項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第五項）の表	三十一万四千一十万円	健康保険法施行令第四十三條の三第五項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第五項）の表	三十一万四千一十万円
第四十三條の三第四項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第四項）の表	六十七万八千九百九十九万円	健康保険法施行令第四十三條の三第四項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第四項）の表	六十七万八千九百九十九万円
第四十三條の三第三項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第三項）の表	六十二万七千五百九十九万円	健康保険法施行令第四十三條の三第三項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第三項）の表	六十二万七千五百九十九万円
第四十三條の三第二項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第二項）の表	四十五万五千九百九十九万円	健康保険法施行令第四十三條の三第二項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第二項）の表	四十五万五千九百九十九万円
第四十三條の三第一項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第一項）の表	二十六万八千九百九十九万円	健康保険法施行令第四十三條の三第一項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第一項）の表	二十六万八千九百九十九万円

第四十三條の三第三項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第三項）の表	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項
第四十三條の三第二項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第二項）の表	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項
第四十三條の三第一項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第一項）の表	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項
第四十三條の三第六項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第六項）の表	改正令附則第三十條の三第六項	改正令附則第三十條の三第六項	改正令附則第三十條の三第六項
第四十三條の三第五項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第五項）の表	改正令附則第三十條の三第五項	改正令附則第三十條の三第五項	改正令附則第三十條の三第五項
第四十三條の三第四項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第四項）の表	改正令附則第三十條の三第四項	改正令附則第三十條の三第四項	改正令附則第三十條の三第四項
第四十三條の三第三項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第三項）の表	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項
第四十三條の三第二項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第二項）の表	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項
第四十三條の三第一項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第一項）の表	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項

第四十三條の三第六項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第六項）の表	改正令附則第三十條の三第六項	改正令附則第三十條の三第六項	改正令附則第三十條の三第六項
第四十三條の三第五項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第五項）の表	改正令附則第三十條の三第五項	改正令附則第三十條の三第五項	改正令附則第三十條の三第五項
第四十三條の三第四項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第四項）の表	改正令附則第三十條の三第四項	改正令附則第三十條の三第四項	改正令附則第三十條の三第四項
第四十三條の三第三項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第三項）の表	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項	改正令附則第三十條の三第三項
第四十三條の三第二項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第二項）の表	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項	改正令附則第三十條の三第二項
第四十三條の三第一項（同条第三項及び第四項並びに第四十二條第六項及び第四十三條の三第一項）の表	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項	改正令附則第三十條の三第一項

2 平成二十年八月一日から平成二十一年七月三十一日まで受けた療養に係る次の各号に掲げる高額介護合算療養費の支給については、当該各号イに掲げる額が、それぞれ当該各号ロに掲げる額を超えるときは、前項の規定にかかわらず、健康保険法施行令第四十三条の二第一項第一号中「前年八月一日から七月三十一日まで」とあるのは、「平成二十年八月一日から平成二十一年七月三十一日まで」と読み替えて、同条から同令第四十四条（第一項を除く。）までの規定を適用する。

一 健康保険法施行令第四十三条の二第一項及び第二項（これらの規定を同条第三項及び第四項並びに同令第四十四条第二項において準用する場合を含む。）の規定による高額介護合算療養費の支給

イ この項の規定により健康保険法施行令第四十三条の二を読み替えて適用する場合の同条第一項（同条第三項及び第四項並びに同令第四十四条第二項において準用する場合を含む。）に規定する介護合算一部負担金等世帯合算額から同令第四十三条の二第一項の介護合算算定基準額を控除した額

ロ イ中「この項」とあるのを「前項」と読み替えてイを適用する場合のイに掲げる額

二 健康保険法施行令第四十三条の二第五項及び第六項（これらの規定を同令第四十四条第三項において準用する場合を含む。）の規定による高額介護合算療養費の支給

イ この項の規定により健康保険法施行令第四十三条の二を読み替えて適用する場合の同条第五項（同令第四十四条第三項において準用する場合を含む。）に規定する介護合算一部負担金等世帯合算額から同令第四十三条の二第五項の介護合算算定基準額を控除した額（当該額が同項に規定する支給基準額以下である場合又は当該介護合算一部負担金等世帯合算額の算定につき同項ただし書に該当する場合には、零とする。）及び同項に規定する七十歳以上介護合算支給総額を合算した額

ロ イ中「この項」とあるのを「前項」と読み替えてイを適用する場合のイに掲げる額

三 健康保険法施行令第四十三条の二第七項（同令第四十四条第三項において準用する場合を含む。以下この号において同じ。）の規定による高額介護合算療養費の支給

イ この項の規定により健康保険法施行令第四十三条の二を読み替えて適用する場合の同条第七項に規定する介護合算一部負担金等世帯合算額から同項の介護合算算定基準額を控除した額（当該額が同項に規定する支給基準額以下である場合又は当該介護合算一部負担金等世帯合算額の算定につき同項ただし書に該当する場合には、零とする。）

ロ イ中「この項」とあるのを「前項」と読み替えてイを適用する場合のイに掲げる額

前項の場合において、次の表の上欄に掲げる健康保険法施行令の規定中同表の中欄に掲げる字句は、それぞれ同表の下欄に掲げる字句とする。

定（他の法令において引用する場合を含む。）は、療養を受ける日が施行日以後の場合について適用し、療養を受ける日が施行日前の場合については、なお従前の例による。

第五條 健康保険法第七十四條第一項第二号の規定が適用される被保険者又は同法第一百十條第二項第一号ハの規定が適用される被扶養者のうち、平成二十一年一月から三月までの間に、特定給付対象療養（健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百十六号）附則第三十二條第一項に規定する特定給付対象療養をいう。）を受けたもの（以下この条において「施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等」という。）に係る新健保令第四十一條第六項の規定による高額療養費の支給については、同項中「を除く」とあるのは、「及び健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百十六号）附則第三十二條第一項に規定する特定給付対象療養を受ける厚生労働大臣が定める給付が行われるべき療養を除く」と読み替えて、同項の規定を適用する。

2 施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等に係る新健保令第四十一條第三項の高額療養費算定基準額については、新健保令第四十二條第三項第一号中「六万二千二百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円とする。」とあるのは、「四万四千四百円」と読み替えて、同項の規定を適用する。

3 施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等に係る新健保令第四十一條第四項の高額療養費算定基準額については、新健保令第四十二條第四項第一号中「三万五千五百円。ただし、高額療養費多数回該当の場合にあつては、二万二千二百円とする。」とあるのは、「二万二千二百円」と読み替えて、同項の規定を適用する。

4 施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等に係る新健保令第四十一條第五項の高額療養費算定基準額については、新健保令第四十二條第五項第一号中「二万四千六百円」とあるのは、「一万二千二百円」と読み替えて、同項の規定を適用する。

5 新健保令第四十三條第一項の規定により施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等について保険者が同項に規定する保険医療機関等に支払う額の限度については、同項第二号イ中「六万二千二百円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、三万五千五百円）。ただ

し、高額療養費多数回該当の場合にあつては、四万四千四百円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、二万二千二百円）とする。」とあるのは、「四万四千四百円（七十五歳到達時特例対象療養に係るものにあつては、二万二千二百円）」と、同項第三号イ中「二万四千六百円」とあるのは、「一万二千二百円」と読み替えて、同項の規定を適用する。この場合において、同条第二項及び第三項の規定の適用については、同条第二項中「前項」とあるのは、「高齢者の医療の確保に関する法律施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百五十七号。次項において「改正令」という。）附則第七号第五項の規定により読み替えられた前項」と、同条第三項中「当該各号」とあるのは、「当該各号（同項第二号又は第三号の規定を改正する附則第五條第五項の規定により読み替えて適用する場合にあつては、第一項第一号並びに同条第五項の規定により読み替えられた第一項第二号及び第三号）」とする。

6 新健保令第四十三條第四項及び第五項の規定は、施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等が外来療養（新健保令第四十一條第五項に規定する外来療養をいう。）を受けた場合において、健康保険法の規定により支払うべき一部負担金等の額（同法第百十五條第一項に規定する一部負担金等の額をいう。）についての支払が行われなかったときの新健保令第四十一條第五項の規定による高額療養費の支給について準用する。この場合において、新健保令第四十三條第四項中「当該療養に要した費用のうち同条第六項から第八項までの規定による高額療養費」として被保険者に支給すべき額に相当する額とあるのは、「同条第五項の規定による高額療養費について、当該一部負担金等の額から高齢者の医療の確保に関する法律施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百五十七号）附則第五條第四項の規定による高額療養費算定基準額（当該外来療養につき算定した費用の額に百分の十を乗じて得た額が当該高額療養費算定基準額を超える場合にあつては、当該乗じて得た額）を控除した額の限度において、」

と、同条第五項中「第四十一條第六項から第八項まで」とあるのは、「第四十一條第五項」と読み替えるものとする。

日雇特例被保険者を被保険者とみなして第一項の規定を適用した場合に施行日以後平成二十年度特例措置対象被保険者等に該当することとなるものに係る高額療養費の支給について準用する。

第六條 平成二十年四月一日から十二月三十一日までの間に受けた療養を含む療養に係る健康保険法の規定による高額介護合算療養費の支給について、健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百十六号）附則第三十三條第一項の規定を適用する場合における新健保令第四十三條の二第一項第一号（同条第三項及び第四項並びに新健保令第四十四條第二項において準用する場合を含む。次項において同じ。）の規定の適用については、同号中「までの規定」とあるのは、「までの規定（平成二十年四月一日から十二月三十一日までの間に受けた療養に係るものにあつては、高齢者の医療の確保に関する法律施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百五十七号）第二条の規定による改正前の第三十五條第一項から第三項までの規定（同条第一項の規定を附則第二條第一項の規定により読み替えて適用する場合にあつては、同項の規定により読み替えられた同令第二條の規定による改正前の第四十一條第一項の規定若しくは同令第二條の規定による改正前の第四十一條第三項の規定又は附則第二條第二項の規定）」とする。

2 平成二十年八月一日から十二月三十一日までの間に受けた療養を含む療養に係る健康保険法の規定による高額介護合算療養費の支給について、健康保険法施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百十六号）附則第三十三條第二項の規定を適用する場合における新健保令第四十三條の二第一項第一号の規定の適用については、同号中「までの規定」とあるのは、「までの規定（平成二十年八月一日から十二月三十一日までの間に受けた療養に係るものにあつては、高齢者の医療の確保に関する法律施行令等の一部を改正する政令（平成二十年政令第百五十七号）第二条の規定による改正前の第三十五條第一項から第三項までの規定）」とする。

附則（平成二〇年二月五日政令第三十七号）抄
第一条 この政令は、平成二十一年一月一日から施行する。

（健康保険法施行令の一部改正に伴う経過措置）
第二条 この政令の施行の日（以下「施行日」という。）前に出産した被保険者若しくは日雇特例被保険者若しくはこれらの者であった者又は被扶養者に係る健康保険法の規定による出産育児一時金又は家族出産育児一時金の額については、なお従前の例による。

附則（平成二十二年三月二三日政令第五二号）
この政令は、平成二十一年四月一日から施行する。
附則（平成二十二年三月二七日政令第六七号）
（施行期日）
第一条 この政令は、公布の日から施行する。
（定義）
第二条 この附則において、次の各号に掲げる用語の意義は、当該各号に定めるところによる。
一 平成十八年健保法改正法 健康保険法等の一部を改正する法律（平成十八年法律第八十三号）をいう。
二 新健保令 この政令による改正後の健康保険法施行令をいう。
三 協会 全国健康保険協会をいう。
四 支部被保険者 健康保険法第六十條第一項に規定する支部被保険者をいう。
五 都道府県単位保険料率 健康保険法第六百六十條第二項に規定する都道府県単位保険料率をいう。
六 経過措置期間適用月 都道府県単位保険料率の変更の場合における当該変更後の都道府県単位保険料率（平成三十二年三月以前に用いられるものに限る。）を用いる最初の月をいう。
七 平均保険料率 一の事業年度における新健保令第四十五條の二第一号に掲げる額の総額の見込額を同号に掲げる額と、当該一の事業年度における同条第二号に掲げる額の総額の見込額を同号に掲げる額とみなして、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五條の三の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。
八 最高都道府県単位保険料率 一の事業年度において新健保令第四十五條の二（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五條の三の規定に基づ

き算定した率をいう。

き算定した都道府県単位保険料率のうち最も高い率をいう。

九 平成二十一年度経過措置基準率 平成二十一年度における最高都道府県単位保険料率から同年度における平均保険料率を控除した率を十で除して得た率をいう。

十 第一号平均保険料率 一の事業年度における新健保令第四十五条の二第一号イに掲げる額の総額の見込額を同号に掲げる額と、当該一の事業年度における同条第二号に掲げる額の総額の見込額を同号に掲げる額とみなして、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。

十一 第一号都道府県単位保険料率 一の事業年度における新健保令第四十五条の二第一号イに掲げる額を同号に掲げる額とみなして、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。

十二 最高第一号都道府県単位保険料率 一の事業年度において新健保令第四十五条の二（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により算定した第一号都道府県単位保険料率のうち最も高い率をいう。

十三 第二号都道府県単位保険料率 一の事業年度における新健保令第四十五条の二第一号ロに掲げる額を同号に掲げる額とみなして、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。

十四 第三号都道府県単位保険料率 一の事業年度における新健保令第四十五条の二第一号ハに掲げる額を同号に掲げる額とみなして、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。

十五 収入等見込額相当率 一の事業年度における取り崩すことが見込まれる準備金の額その他健康保険事業に要する費用のための収入の見込額のうち当該支那被保険者を単位とする健康保険の当該一の事業年度の財政におい

てその収入とみなすべき額として協会が定める額を新健保令第四十五条の二第一号に掲げる額とみなし、同条（経過措置期間適用月が三月以外の月の場合）にあつては、新健保令第四十五条の三（三）の規定の例により厚生労働省令で定めるところにより算定した率をいう。

十六 平成二十一年度調整基礎率 平成二十一年度における最高第一号都道府県単位保険料率から同年度における第一号平均保険料率を控除した率を十で除して得た率をいう。

第十七条 平成二十五年及び平成二十六年において、前条第十五号中「一の事業年度において取り崩すことが見込まれる準備金の額その他健康保険事業」とあるのは、「健康保険事業」とする。

第十八条 都道府県単位保険料率に係る経過措置の期限（都道府県単位保険料率に改正法附則第三十一条の政令で定める日は、平成三十二年三月三十一日とする。）

第十九条 都道府県単位保険料率の変更の場合における調整（都道府県単位保険料率の変更の場合における調整）

第二十条 都道府県単位保険料率の算定に於ける平成十八年健保法等改正法附則第三十一条の政令で定める基準は、経過措置期間適用月の属する事業年度（経過措置期間適用月が三月の場合）にあつては、当該三月の属する事業年度の翌事業年度。以下この項及び次条第一項において同じ。）における平均保険料率に、当該経過措置期間適用月の属する事業年度における次条の規定による調整前の都道府県単位保険料率の分布状況及び当該経過措置期間適用月から平成三十二年三月までの期間を勘案して、平成二十一年度経過措置基準率と当該経過措置期間適用月の属する事業年度における最高都道府県単位保険料率から当該経過措置期間適用月の属する事業年度における平均保険料率を控除した率との差の範囲内において、厚生労働大臣が定める平成二十二年以降経過措置基準率を加えた率と千分の八十二との率の差とする。

第二十一条 前項の平成二十二年以降経過措置基準率は、平成二十二年から平成三十一年度までの各事業年度ごとに適用されるべき率として、それぞれ当該各事業年度の前事業年度末までに、当該各事業年度の前事業年度に適用されるべきものとして定めた同項の平成二十二年以降経過

措置基準率以上の率として定めるものとする。ただし、平成二十二年に適用されるべき同項の平成二十二年以降経過措置基準率は、平成二十一年度経過措置基準率以上の率とする。

第二十二条 都道府県単位保険料率の変更の場合における当該都道府県単位保険料率の算定に於ける平成十八年健保法等改正法附則第三十一条の規定に基づく調整は、次の各号に掲げる都道府県単位保険料率の区分に応じ、当該各号に定めるところにより行うものとする。

一 経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号都道府県単位保険料率が当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号平均保険料率以上である場合 厚生労働省令で定めるところにより、イからニまでに掲げる率を合算した率からホに掲げる率を控除した率を当該都道府県単位保険料率とする。

イ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号平均保険料率

ロ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号都道府県単位保険料率から当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号平均保険料率を控除した率に、当該経過措置期間適用月の属する事業年度におけるこの条の規定による調整前の都道府県単位保険料率の分布状況及び当該経過措置期間適用月から平成三十二年三月までの期間を勘案して、平成二十一年度調整基礎率と当該経過措置期間適用月の属する事業年度における最高第一号都道府県単位保険料率から当該第一号平均保険料率を控除した率との差の範囲内において、厚生労働大臣が定める平成二十二年以降調整基礎率を当該最高第一号都道府県単位保険料率から当該第一号平均保険料率を控除した率で除して得た率を乗じて得た率

ハ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第二号都道府県単位保険料率

ニ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第三号都道府県単位保険料率

ホ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における収入等見込額相当率

二十三 前項第一号ロの平成二十二年以降調整基礎率は、平成二十二年から平成三十一年度までの各事業年度ごとに適用されるべき率として、それぞれ当該各事業年度の前事業年度末までに、当該各事業年度の前事業年度に適用されるべきものとして定めた同号ロの平成二十二年以降調整基礎率以上の率として定めるものとする。ただし、平成二十二年に適用されるべき同号ロの平成二十二年以降調整基礎率は、平成二十一年度調整基礎率以上の率とする。

第二十四条 附則（平成二十二年四月三〇日政令第一三五号）抄

第一條 この政令は、平成二十一年五月一日から施行する。

第二條 この政令の施行の日（以下「施行日」という。）前に行われた療養に係る健康保険法の規定による高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成二十二年五月二日政令第一三九号）

この政令は、公布の日から施行する。

一 号平均保険料率未満である場合 厚生労働省令で定めるところにより、イに掲げる率からロに掲げる率を控除した率にハ及びニに掲げる率を合算した率を加えた率からホに掲げる率を控除した率を当該都道府県単位保険料率とする。

イ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号平均保険料率

ロ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号都道府県単位保険料率から当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第一号平均保険料率を控除した率に、前号ロの平成二十二年以降調整基礎率を当該経過措置期間適用月の属する事業年度における最高第一号都道府県単位保険料率から当該第一号平均保険料率を控除した率で除して得た率を乗じて得た率

ハ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第二号都道府県単位保険料率

ニ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における第三号都道府県単位保険料率

ホ 当該経過措置期間適用月の属する事業年度における収入等見込額相当率

二十四 前項第一号ロの平成二十二年以降調整基礎率は、平成二十二年から平成三十一年度までの各事業年度ごとに適用されるべき率として、それぞれ当該各事業年度の前事業年度末までに、当該各事業年度の前事業年度に適用されるべきものとして定めた同号ロの平成二十二年以降調整基礎率以上の率として定めるものとする。ただし、平成二十二年に適用されるべき同号ロの平成二十二年以降調整基礎率は、平成二十一年度調整基礎率以上の率とする。

第二十五条 附則（平成二十二年四月三〇日政令第一三五号）抄

第一條 この政令は、平成二十一年五月一日から施行する。

第二條 この政令の施行の日（以下「施行日」という。）前に行われた療養に係る健康保険法の規定による高額療養費の支給については、なお従前の例による。

附則（平成二十二年五月二日政令第一三九号）

この政令は、公布の日から施行する。

第二十六条 附則（平成二十二年五月二日政令第一三九号）

この政令は、公布の日から施行する。

